

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 鹿児島県沖永良部島国頭

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-05-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 横山, 晶子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00003556">https://doi.org/10.15084/00003556</a>

# 鹿児島県沖永良部島国頭\*

横山晶子

日本学術振興会特別研究員／東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

## 1. はじめに

本稿では、鹿児島県大島郡沖永良部島国頭方言の文法の概説として、言語の概説、社会言語学的状況、音韻論、形態論、統語論を論じ、自然談話資料を付する。本論文は、国頭方言の包括的な記述文法である横山（2017）を、その後の調査により修正し、より簡潔にまとめたものである。2章「社会言語学的状況」は、新しく加えた章である。解釈を変えた箇所については、その本文や脚注で言及する。主なインフォーマントは、国頭集落で言語形成期を過ごしたT.N氏（男性、1947年生）、T.S氏（1946年生）である。

## 2. 言語の概要

### 2.1 地理

国頭方言は、北琉球沖永良部島国頭集落（行政的には、鹿児島県大島郡和泊町国頭集落）で話されている言語である。沖永良部島は面積 93.63 m<sup>2</sup>、人口約 14000 人の島で、島内には 42 の字（集落）がある。国頭集落は島の最東部に位置する集落で、人口約 1000 人、島内で第三の人口規模を誇る比較的大きな集落である。

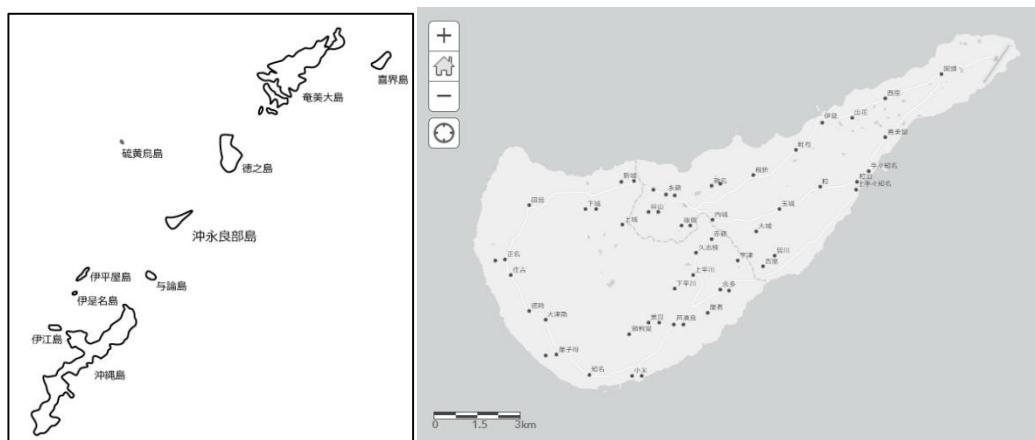


図 1 沖永良部島・国頭集落の位置

\* 本稿の完成にあたり、適切なアドバイスをして下さった、査読者の先生方、編集委員の先生方に感謝の意を表します。いつも調査にご協力いただき、沖永良部島国頭集落の皆様、特に西村富明先生、佐々木隆さん、田中美保子先生には、感謝の念にたえません。本当にありがとうございました。なお本稿は、国立国語研究所共同プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」、特別研究員奨励費 20J40023、科研費 18K12392 の支援に基づく調査の結果を含みます。

## 2.2 系統

琉球諸語は大きく北琉球諸語と南琉球諸語に分けられる。北琉球諸語の分類には諸説あり、奄美／沖縄に2分類する立場と、奄美／沖永良部～北沖縄／沖縄に3分類する立場がある。分類の手法は論者によって異なり、音韻や語の活用の類似性から分類する立場と、改新（innovation）という新しい言語変化の共有に基づいて分類する立場がある。

言語分類を「系統」に基づくものに限定した場合、音韻の類似性よりも改新の共有を基準とする方が、祖語からの継承や言語接触による借用の影響を受けることなく、直近の分岐を明らかに出来ると言われる（Pellard 2015: 15）。

この改新を用いた分類に基づくと、北琉球諸語は奄美／沖縄に2分類され、沖永良部語は奄美諸方言の下位分類にあたる（Pellard 2015, ローレンス 2006）。

## 3. 社会言語学的状況

沖永良部語、および国頭方言の社会言語学状況として、言語の衰退度合いと、言語意識を論じる。以下に述べる通り、沖永良部島全域を対象とした調査から、方言を流暢に話せると感じている人が多いのは、2020年度時点での60代以上（1960年より前の生まれ）である。一方、言語実験に基づく調査から、2017年度の時点で40代以上（1977年より前の生まれ）は、話者と同等の理解度能力を有している。このため、沖永良部語の産出能力がある60代以上の「話者」に加え、聞いたら分かる「潜在話者」と言える層が40代・50代の範囲で広がっていると考えられる。

言語意識調査において、沖永良部語の継承に対する希望を尋ねると、9割が「次世代への言語継承を希望」しており、継承に向けた機運は高い。更に沖永良部語の能力向上や継承への希望を尋ねると、現在産出能力がないと感じている住民の6割以上が産出能力の向上を、理解能力がないと感じている住民の8割近くが理解能力の向上を希望しており、学習意欲も高いと言える。

### 3.1.1 衰退度合い

横山・籠宮（2018）は、国頭集落で中学卒業時までを過ごした島民を対象に、国頭方言の理解度が年齢によってどう推移するかを、テスト形式の言語実験によって明らかにした。

まず、国頭方言で収録した音声を20代～90代の調査協力者35名に聞かせ、その理解度を質問によって測定した。次に、年齢による正答率の変化をロジスティック回帰によって分析した。

その結果、図2のように2017年度時点で40代以上（1977年より前の生まれ）が話者と同程度に伝統方言を理解できる一方で、30代後半（1982年より前の生まれ）から理解度が落ち始め、更に下の世代では急激に理解度が低下することが分かった。

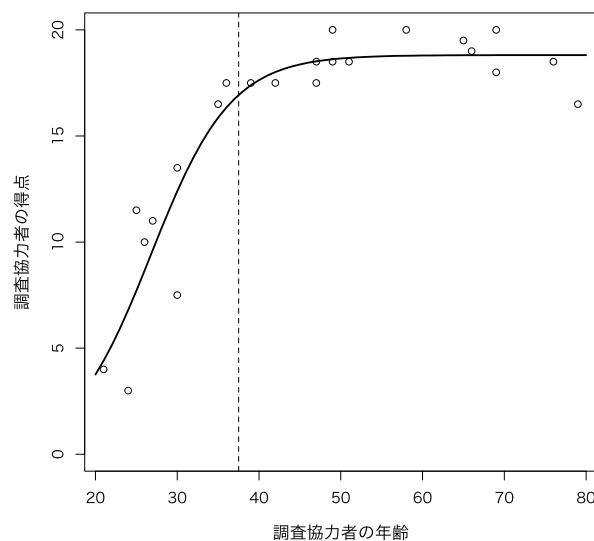


図2 言語の理解度の推移（横山・籠宮 2018：365）：グラフの年齢は、2018年4月1日時。

### 3.1.2 言語意識

2020年12月～2021年1月にかけて、島内に住む島民505名を対象に、オンラインと、紙面調査を併用した意識調査を行った（詳細は横山2021で公開）。

#### 2.1.2.1 言語の產出能力に対する自己評価

島出身者の住民に対し「方言をどれくらい話せますか？」という質問の結果を年代別に分析した。すると「流暢に話せる」「ある程度話せる」と回答した人の割合は、ほぼ100%の80代以上から年代が下がるごとに減少し、50代で5割を切ることが分かった。

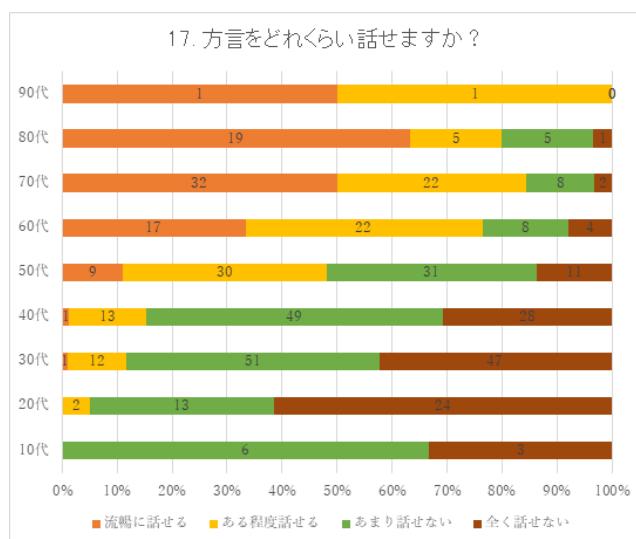


図3 言語の產出能力の自己評価（横山2021より）

このうち「（方言を）あまり話せない」「全く話せない」と回答した人（291名）に対し「方言を話せるようになりたいか」を尋ねた。その結果、「是非、話せるようになりたい」20%，「出来れば、話せるようになりたい」44%，「あまり、話せなくてもよい」26%，「全く話せなくともよい」6%となった。「話せるようになりたい」と回答した人の合計は、64%であり、いま方言の産出能力がないと感じている人の6割以上の人々が産出能力の上昇を希望していることが分かった。

### 2.1.2.2 言語の理解能力に対する自己評価

次に、島出身の住民に対し「方言を聞いてどれくらい理解できますか？」という質問をした。結果を年代別にみると、年齢が下がるにつれて「よく分かる」「ある程度わかる」の合計が減つて行き、30代で50%を切ることが分かった。この質問は「自己評価」を尋ねるものであるが、前節で紹介した言語実験の結果との乖離は少ないよう見える。

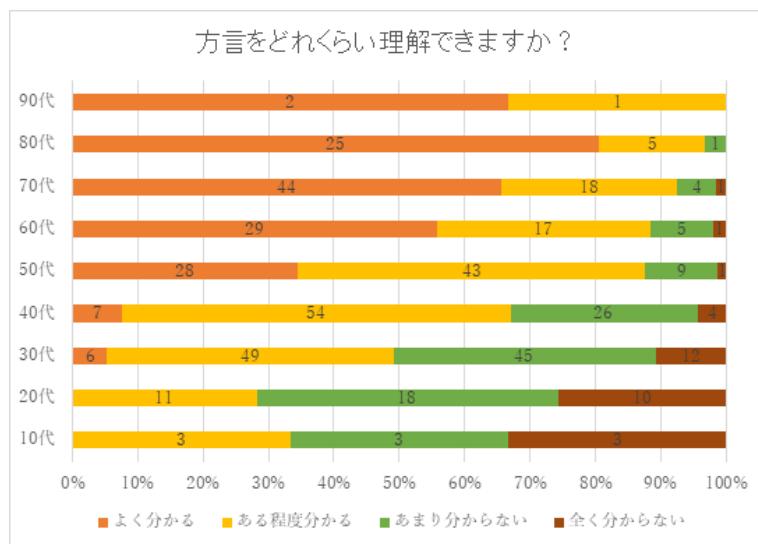


図4 言語の理解能力の自己評価（横山 2021 より）

このうち「（方言を）あまり分からない」「全く分からない」と回答した人（143名）に対し「方言を理解できるようになりたいか」を尋ねた。その結果、「是非、理解できるようになりたい」17%，「出来れば、理解できるようになりたい」59%，「あまり、理解できるようにならなくてよい」18%，「全く理解できるようにならなくてよい」6%となった。「理解できるようになりたい」と回答した人を合わせると76%にのぼり、いま方言の理解能力がないと感じている人の8割近くの人が理解能力の上昇を希望していることが分かった。

### 2.1.2.3 言語の継承に対する希望

最後に「方言を次世代に継承したいと思いますか」という質問をした（図5）。「継承したい」と回答した人は89%に上り、年代を問わず、継承に好意的な意見を持っていることが分かった。

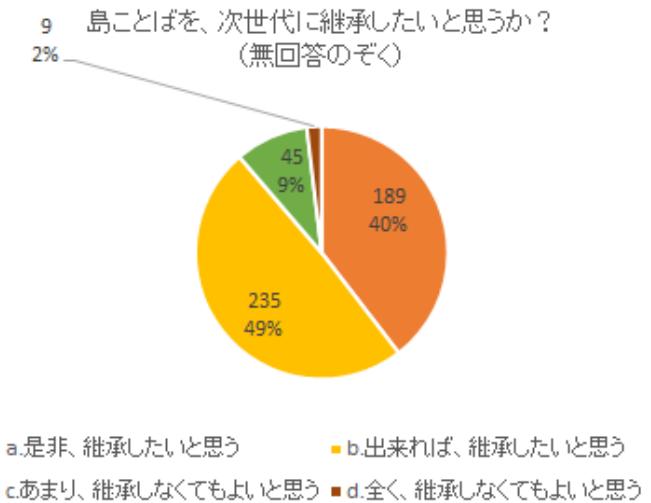


図5 言語の次世代への継承の希望（横山 2021 より）

## 4. 音韻論

### 4.1 音素

国頭方言の言語音は、(a) 声道の極端な狭めがあるか、(b) 単独でモーラを担えるか、といった基準により、母音、半母音、子音に分類することが出来る。声道の極端な狭めがなく、単独でモーラを担えるものを「母音」、声道の極端な狭めがなく、単独でモーラを担えないものを「半母音」、声道の極端な狭めがあるものを「子音」とする。

#### 4.1.1 母音音素

国頭方言の母音音素は表1のようにまとめられる。表中の横軸は舌の前後位置を、縦軸は舌の高さを表す。

表1 母音音素

	前舌	中舌	後舌
高段	i [i]		u [u <sup>β</sup> ]
中段	e [e]		o [o]
下段		a [a]	

- (1) [a] は、[a] よりもやや後方に舌があることを表す。
- (2) [u<sup>β</sup>] は、唇を突き出さずに上唇と下唇との間の空間を狭める「圧縮円唇 (compressed rounding)」であることを表す。
- (3) [e] [o] は長母音で現れることが多く、短母音で現れることは少ない。[e][o] が短母音で現れる例には、/cjire/ [tɕire] 「同輩」、/heNnja/ [hen̪nja] 「腕」、/saNpo/[sampo] 「うずら」、/fa-rozji/[ɸarodzi] 「親戚」などがある。

これ以降の音声表記においては、母音の表記を簡略化し、[ə]を[a], [w<sup>θ</sup>]を[u]と表記する。

#### 4.1.2 半母音

半母音音素には、/j/[j] と /w/[w] の 2 つがある。半母音[j]と[w]は、(a) 前に声門閉鎖音[?]を伴うことが出来る、(b) 子音と母音の間に位置することが出来るといった分布特徴がある。(4) のミニマル・ペアから明らかのように、半母音の前の声門閉鎖音の有無は弁別的である。

##### (4) 半母音前の声門閉鎖音

[?ju:] 「魚」 vs. [ju:] 「湯」

[?wa:] 「豚」 vs. [wa:] 「私」

#### 4.1.3 子音

子音音素として、/p//b//t//d//n//k//g//ʔ//m//M//N//r//f//s//z//c//h/ の 17 個を認める。半母音および子音の音素表は表 2 のようにまとめられる。表の横軸は調音位置、縦軸は調音方法を表す。同一セル内は発声(phonation), すなわち声門の状態の違いを表している。具体的には、左から無声子音、有声子音、喉頭化子音を表す。

表 2 半母音・子音音素

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
破裂音	p [p] b [b]	t [t] d [d]		k[k~k <sup>?</sup> ] g [g]	?[?]
鼻音	m [m] M [m <sup>?</sup> ]	n [n]		N [m~n~ŋ~n]	
弾き音		r [r]			
摩擦音 破擦音	f [ɸ]	s [s] z [(d)z]	c [ts]		h[h]
接近音	w [w]		j [j]		

(5) /N/ は、後続する子音に調音点が同化する。後続する子音が両唇音 (p, b, m) の時は[m], 後続する子音が、摩擦音以外の歯茎音 (t, d, n, r) の時は[n], 後続する子音が軟口蓋音 (g, k) の時は[ŋ], 語末や母音前では[N]で現れる。その他の子音の前での発音は明らかではない。

(6) /z/ は、[z]と[dz]の自由異音がある。例えば/aza/「あざ」は[aza] または[adza]と発音される。

(7) /se/ は [se] と [ce] の自由異音がある。例えば、/seNsuu/「戦争」[sensu:] だけではなく、[censu:] と発音されることがある。

(8) /ʔ/[?]は語頭の半母音の前でのみ現れる。

(9) M [m<sup>?</sup>]は語頭のみで現れる。

(10) /h/ [h] は、 a, e, o の直前でのみ現れる。

(11) [tɛ] を /cj/, [ɛ] を /sj/, [z] を /zj/, [ɸ] を /hj/ と表す。

## 4.2 音節構造

分節音よりも大きな単位として、国頭方言の記述には「モーラ」「音節」が認められる。モーラに関しては、アクセントの規則と語の長さに関する制約が、音節の認定に対しては、アクセントの規則が認定の裏付けとなる。

### 4.2.1 モーラ

アクセント規則の規則を検討すると (C)V がピッチ変動を担う単位になっており、アクセントの記述に有用な単位だとわかる。このため、このような「短母音 1 つから成る音韻的な長さ」を「モーラ」と定義する。

モーラを担う単位は、(a) 短母音 1 つ、の他に、(b) 長母音の前半／後半の要素、(c) 二重母音の前半／後半の要素、(d) 鼻音連続の前半部、(e) 語末の鼻音、(f) 阻害子音連続の前半部がある。

また、モーラを 1 つの韻律単位と認めた時、国頭方言には語の長さについて(12)の制約が存在する。この語の短さに関する制約は、一般に「最小語制約 (word minimality constraint: Ito 1990)」として知られている。

(12) 語の長さに関する制約

語は最小でも 2 モーラの長さを持つ。

### 4.2.2 音節

国頭方言の音節構造は、(13) のように表すことが出来る。C<sub>1</sub>の位置には、/N/ を除くすべての子音が、C<sub>2</sub>には半母音が入る。V<sub>1</sub>, V<sub>2</sub>の位置にはすべての母音が入るが、組み合わせには制限がある。C<sub>3</sub>の位置には、/N/ または、次の音節の C<sub>1</sub>と同じ子音が入る。母音より前に子音が 2 つ並ぶ場合、C<sub>1</sub>, C<sub>2</sub>に入る子音の組み合わせは表 3 の通りである。

(13) 国頭方言の音節構造

(C<sub>1</sub>) (C<sub>2</sub>) V<sub>1</sub> (V<sub>2</sub>) (C<sub>3</sub>)

表 3 頭子音に現れる子音連続

C <sub>1</sub>	C <sub>2</sub>
?	半母音 (j, w)
k, g, s, z, c, n, h, b, m, r, M	j
k, g	w

核となる母音には (a) 短母音, (b) 長母音（短母音の連続として捉える）, (b) 二重母音がある。このうち(c) 二重母音には、前半部と後半部の組み合わせに制限がある。現時点では見つかっており、可能な組み合わせは(14)の通りである。

(14) 許容される二重母音

- ai ex. *mai* 「尻」
- iu ex. *saiuduja* 「走ること」
- ui ex. *fui* 「声」
- oi ex. *koi* 「鍬」
- oe ex. *sjoe* 「～するの？」

尾子音に入ることが出来るのは、(a)/N/, または(b) 次の音節の頭子音と同じ阻害音である。(b) 子音連続が可能な子音は、(73) の通りである。

(15) 許容される子音連続

- p ex. *happui* 「二枚貝」
- k ex. *mukka* 「肛門」
- c ex. *cjiccjuu* 「月」
- t ex. *fattee* 「畑」
- f ex. *-ffa* 「～羽」
- s ex. *jassee* 「野菜」

### 4.3 アクセント

国頭方言の名詞アクセントは、上げ核の有無と位置が弁別的な多型アクセントである。核を担う単位はモーラであり、アクセントが指定される単位は語である。a型は無核、b型は語末から1モーラ目、c型は語末から2モーラ目、d型は語末から3モーラ目…と核の位置が決まる。上げ核は、核の次の韻律単位を上昇させる。上昇させる単位は、3モーラ以下の語の場合は1モーラ、4モーラ以上の語については1音節である。

核は移動することがある。まず、b型は2モーラ以上の助詞が後接するとき、核の位置が1モーラ右側に移る。例えば、2モーラ b型の *jama* 「山」 は単独で[ja]maと発音し、語末に核があるように見えるが、2モーラ助詞=kara が接続すると[jama]ka[ra]となり、助詞の1モーラ目に核があると解釈できる（4.3.1の議論を参照）。

さらに、4モーラ以上の語において、重音節の第一母音に核がある時に、核の位置が1つ左側に移る。例えば4モーラ語 c型の *kiNnjuu* 「昨日」 や4モーラ語 e型の *hookusu* 「ほくろ」 は、それぞれ重音節の1モーラ目（下線部）に核があるため、核が左側に移り、それぞれ[ki]N[njuu], [hoo]kusuと発音すると考える（4.3.3の議論を参照）。

上げ核は実現されなくてはならず、上昇させる要素が核の後ろにない場合、核を担う要素が長音化したり、核の位置が1モーラ左側に移ったりすることで上げ核を実現する。

また、弁別的な上昇の他に余剰上昇がある。無核語は文節末（語に1つの助詞が接続したもの<sup>1)</sup>にかけてピッチが上昇する<sup>2)</sup>。有核語は語頭が高くなる。b型は核より前のすべての要素、c, d型は語頭の1音節が高くなる。なお、本稿のデータは言い切り形で発音されたデータである。

#### 4.3.1 2モーラ語

2モーラの名詞は、単独形では区別が明瞭でないが、助詞を接続することでa型、b型、c型の3つの型を区別することが出来る（表4）。

a型は無核で、当該の語を含む文節末に向けてピッチが上昇する。b型は語末モーラに上げ核が付与され、従って核の次のモーラが上昇する。また余剰上昇として、核を担うモーラに先行する、全てのモーラが高いピッチとなる。b型に特徴的なのは、[jama]=ka[ra]に見られるように、2モーラ以上の助詞が後続した際に、核の位置が1モーラ右側に移ることである。

b型の語において興味深いのは、*jama*「山」の単独形で、HL(H)というピッチになるのに対し、*mii*「目」はLHというピッチになることである。これは、上げ核が上昇させる要素が核の後ろにないために、前者は「核を担う分節音が長音化する」ことによって上げ核が実現されたのに対し、後者は「核の位置が左に1モーラ移る」ことで上げ核が実現されたためだと思われる。

c型は後ろから2つ目のモーラに核があり、したがって核の次のモーラが上昇する。

表4 2モーラ語のアクセント

（表中の「解釈」はアクセントの音韻論的解釈を示し、核の位置を下線・太字で示す。）

型	意味	解釈	単独	=nu	=kara	=kara=mu
a	血	/cjii/	cji[i]	cjii=[nu]	cjii=[kara]	cjii=[kara]=mu
a	水	/mizji/	mi[zji]	mizji=[nu]	mizji=[kara]	mizji=[kara]=mu
b	目	/mii/ <sup>1)</sup>	mi[i]	[mi]i=[nu]	[mii]=ka[ra]	[mii]=ka[ra]=mu
b	山	/jama/ <sup>2)</sup>	[ja]ma[a]	[ja]ma=[nu]	[jama]=ka[ra]	[jama]=ka[ra]=mu
c	中	/naa/	na[a]	na[a]=nu	na[a]=kara	na[a]=kara=mu
c	鍋	/nabi/	na[bi]	na[bi]=nu	na[bi]=kara	na[bi]=kara=mu

#### 4.3.2 3モーラ語

3モーラ語はa型、b型、c型、d型の4つの型に分類される（表5）。a型、b型、c型の体系は2モーラ語と同じである。

<sup>1</sup> 2つ目の助詞以降は、文節に含まれないとする。

<sup>2</sup> 余剰上昇がどこから起こるのかは特定できていない。

d型は後ろから3モーラ目に核があり、従って核の次のモーラが上昇する。核に押し上げられたモーラの後からピッチが下降する。琉球諸方言の多くは、2型あるいは3型のアクセント対立を持つとされ、3モーラ語に4つのアクセント対立を持つ方言は少数である。

上野（2000）は、奄美諸方言にみられる3音節d型の語について、「第2モーラが音声的に弱い音ばかりという偏りがある」と述べている。ここで「音声的に弱い音」とは狭母音や特殊拍を指す。国頭方言の多くの語にもこの音韻特徴が当てはまるが、*takako*など多くの人名、*tomato*など一部の外来語もd型に属しており、共時的には特定の音韻特徴に偏る型ではなくなっている。

表5 3モーラ語のアクセント

（表中の「解釈」はアクセントの音韻論的解釈を示し、核の位置を下線・太字で示す。）

型	意味	解釈	単独	=nu	=kara	=kara=mu
a	煙	/hjibusji/	hjibu[sji]	hjibusji=[nu]	hjibusji=[kara]	hjibusji=[kara]=mu
a	踊り	/wudui/	wudu[i]	wudui=[nu]	wudui=[kara]	wudui=[kara]=mu
b	鏡	/hagami/	[haga]mi[i]	[haga]mi=[nu]	[hagami]=ka[ra]	[hagami]=ka[ra]=mu
b	豆	/maami/	[maa]mi[i]	[maa]mi=[nu]	[maami]=ka[ra]	[maami]=ka[ra]=mu
c	今年	/hutabi/	[hu]ta[bi]	[hu]ta[bi]=nu	[hu]ta[bi]=kara	[hu]ta[bi]=ka[ra]=mu <sup>3</sup>
c	ご馳走	/sjuuki/	[sju]u[ki]	[sju]u[ki]=nu	[hu]ta[bi]=kara	[sju]u[ki]=ka[ra]=mu
d	鯨	/guzjija/	gu[zji]ja	gu[zji]ja=nu	gu[zji]ja=kara	gu[zji]ja=ka[ra]=mu
d	狐	/kicjini/	ki[cji]ni	ki[cji]ni=nu	ki[cji]ni=kara	ki[cji]ni=ka[ra]=mu

#### 4.3.3 4モーラ語

4モーラにはa, b, c型と、もう1つのアクセント型が確認された。この「4つ目のアクセント型」は、語末から4つ目に核があるため「e型」と呼ぶことにする。

a型は3モーラまでと同様である。b型は後ろから1モーラ目に核が付与され、従って核の後の1音節が上昇する。

b型に関して着目されるのは、*heNnjaa*「二の腕」、*sjibui*「冬瓜」など、重音節終わりの語の単独形で、ピッチがHHLHのようにc型と同じになることである。これは上げ核を実現するために長音化が出来ず、核の位置が左側に1モーラ移るためだと解釈される。

c型は後ろから2モーラ目に核が付与され、従って核の後の1音節が上昇する。c型に関して着目されるのは、*kiNnjuu*「昨日」、*jumudui*「雀」など、重音節終わりの語で、ピッチが[ki]N[njuu]、[ju]mu[dui]など、HLHHになることである<sup>4</sup>。これは、一見別のアクセント型(d型)と分析出来そうだが、そうするとd型は「重音節終わり」という音韻特徴を持つ語だけ所属することになってしまう。そこでd型を認めず、*kiNnjuu, jumudui*は、核の移動規則(重音節の第一母音に核があ

<sup>3</sup> 3モーラc型、d型名詞において=kara=muを接続した際に、なぜ[ra]が高くなるのかは分からない。

<sup>4</sup> 横山（2017）では、これらの語をd型に分類したが、ここ記述する理由で解釈を変更した。

る時に、核の位置が 1 つ左側に移る) によって、後ろから 2 モーラ目にあった核が、後ろから 3 モーラ目に移動したと解釈している。

e 型は、後ろから 4 モーラ目に核が付与され、従って核の後ろの 1 音節が上昇する。e 型に着目されるのは、重音節始まりの語で、ピッチが [hoo]kusu「ほくろ／あざ」のように、HHLL になることである。これは「重音節の第一母音に核がある時に、核の位置が 1 つ左側に移る」という規則を立てて解釈している。但し「ない要素」に核が移動すると考えることは問題があるかもしれない。実際に 2 モーラでは移動が起きておらず、規則の不整合が起きている。この型には非常に少数の語が所属する。

表 6 4 モーラ語のアクセント型

(表中の「解釈」はアクセントの音韻論的解釈を示し、核の位置を下線・太字で示す。)

型	意味	解釈	単独	=nu 「～が」	=kara 「～から」	=kara=mu 「～からも」
a	額	haraNcja	haraN[cja	haraNcja=[nu	haraNcja=[kara	haraNcja=[kara]=mu
a	盃	saazjicji	saazji[cji	saazjicji=[nu	saazjicji=ka[ra	saazjicji=ka[ra]=mu
b	雷	hamiduru	[hamidu]ru[	[hamidu]ru=[nu	[hamiduru]=ka[ra	[hamiduru]=ka[ra]mu
b	二の腕	heNnjaa	[heN]nja[a	[heN]njaa=[nu	[heNnjaa]=ka[ra	[heNnjaa]=ka[ra]=mu
c	早朝	sutumi	[su]tumi[ti	[su]tumi[ti]=nu	[su]tumi[ti]=kara	[su]tumi[ti]=kara=mu
c	若い娘	meerabi	[mee]ra[bi	[mee]ra[bi]=nu	[mee]ra[bi]=kara	[mee]ra[bi]=kara=mu
c	昨日	kiNnjuu	[ki]N[njuu	[ki]N[njuu]=nu	[ki]N[njuu]=kara	[ki]N[njuu]=kara=mu
e	国頭	kunigami	ku[ni]gami	ku[ni]gami=nu	ku[ni]gami=kara	ku[ni]gami=kara=mu
e	ほくろ	hookusu	[hoo]kusu	[hoo]kusu=nu	[hoo]kusu=kara	[hoo]kusu=kara=mu

このように、現在の解釈では 4 モーラの名詞に d 型はないが、(a) 他の品詞の 4 モーラ語に「後ろから 3 モーラ目に核がある」語があること (ex. [wa]ro[sa]N 「悪い」など形容詞の 1 つの型, [na]ju[ma]ze 「なるでしょ」など動詞の-maze 形), (b) 3 モーラ語に d 型は認めざるを得ず、またより長い複合語に「後ろから 3 モーラ目に核がある」語があること (ex. [biniiru]bu[ku]ru ビニール袋) から、4 モーラにも体系上は d 型を認め、何らかの理由で所属語彙が見つかっていない、体系の「あきま」 (服部 1960) であると考えている。

#### 4.4 イントネーション

イントネーションの初期報告として疑問文のイントネーションについてまとめる。国頭方言の疑問イントネーションは基本的に下降調であるが、特定の条件が重なった時のみ上昇調や平板になる。これは、平叙文との弁別性を保つためと考えられる。疑問詞疑問文においては、上記に記した文末イントネーションの他、文焦点のある疑問詞以降の語において、ピッチレンジが縮小される現象が観察される。

#### 4.4.1 肯否疑問文のイントネーション

疑問助詞や疑問接辞など、何かしらの形態標示がある疑問文を肯否疑問文と呼ぶ。肯否疑問文は述語のアクセント型に関わらず、下降調を取る。

図6は、a型アクセントを持つ名詞 *hjibusji*「煙」が述語にきた文である。左図は文末助詞=doo 「～よ」を接続した平叙文、右図は名詞述語に肯否疑問助詞=naa 「～か？」を接続した肯否疑問文である。a型は無核のため、平叙文において、最終音節が高く平らに発音される（左図）。一方肯否疑問文においては、次末音節でピッチが上昇したのち、最終音節に入る直前からピッチが下降している（右図）。

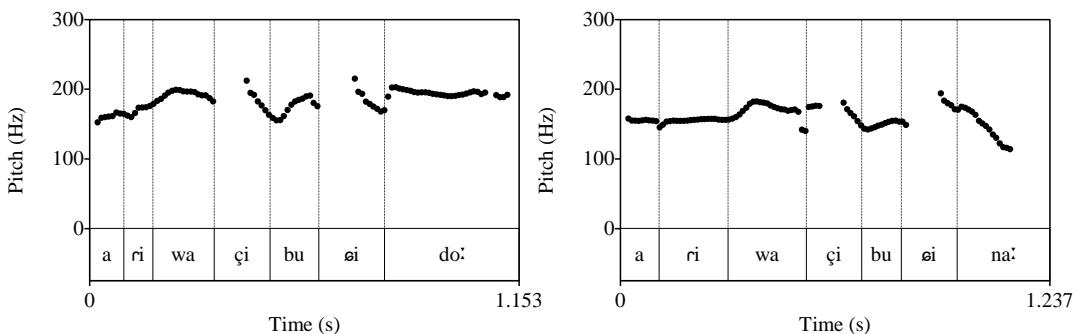


図6 ari[wa] çibuç[i]do: 「あれは煙だよ」／ ari[wa] çibuç[i]na: 「あれは煙か？」

#### 4.4.2 無標疑問文のイントネーション

国頭方言の疑問文は、形態的な標示を持つことが多いものの、形態的な標示がなくイントネーションのみで疑問を表すこともできる。こうした疑問文を「無標疑問文」と呼ぶ。無標疑問文も下降調だが、述語のアクセント型が低く終わる語（3拍d型）の時のみそれ以外の音調が現れる。これは、イントネーションによって平叙文との弁別性を確保したためだと考えられる。

図7はa型アクセントの名詞 *hjibusji*「煙」を発音した時の図である。a型は無核のため、平叙文では最終モーラのピッチが高くなる（左図）。一方で無標示疑問文の語末では、最終音節の内部（名詞の最終モーラと長音化した部分）でピッチの上昇し、その後下降が生じている（右図）。

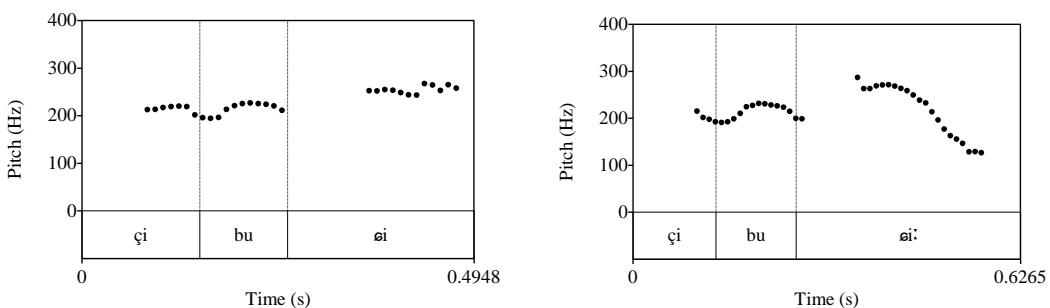


図7 平叙文 çibuç[i]／無標疑問文 çibuç[i]i

これに対し、図 8 は d 型アクセントの名詞 *nuzumi* 「ねずみ」を発音した時の図である。d 型は後ろから 3 モーラ目に核があるため、平叙文ではピッチが次末モーラで上昇し、最終モーラにかけて下降する（左図）。一方で無標示疑問文では、平叙文と同様に次末モーラから最終モーラにかけてピッチの下降が起きたのち、語末で再びピッチが上昇する（右図）。

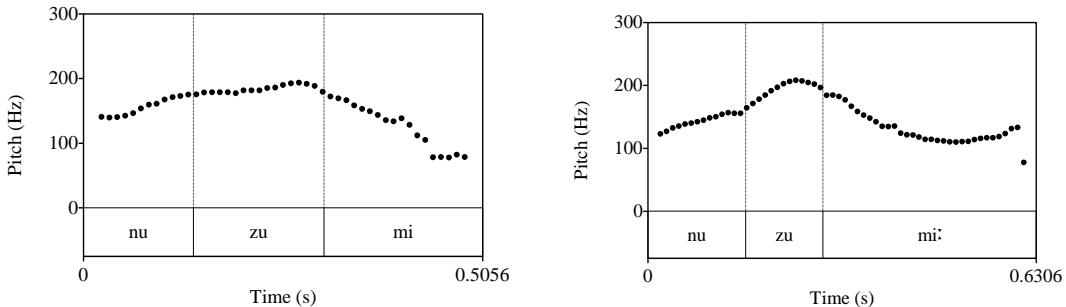


図 8 平叙文 nu [zu]mi／無標疑問文 nu[zu]mi[i]

疑問文の場合、上昇調をとるだけでなく、平板調になったり、nu[zu]mi のピッチレンジが大きくなったりするケースも観察された。いずれにしても平叙文の時と異なるピッチ変動で疑問を標示していると考えられるため、国頭方言の疑問イントネーションは表 7 のようにまとめられる。

表 7 疑問イントネーション

文中の疑問助詞	疑問イントネーション
+	下降
-	平叙文と弁別的なピッチ変化

#### 4.4.3 疑問詞疑問文

文中に疑問詞がある疑問文を「疑問詞疑問文」と呼ぶ。疑問詞疑問文は、文の焦点となる疑問詞のピッチへの変動幅が拡大される一方で、後続する語のピッチの変動幅が縮小される post-focal reduction (Ishihara 2015: 599) ないし post-focal compression (Igarashi 2015: 562) と呼ばれる現象が観察される。文末の音調は、これまでと同様に「文末音節が低くなる」という特徴を持つ。

図 9 は a 型アクセントの動詞 *hoojuN* 「買う」を発音した時の図である。疑問詞 *nuu* 「何」で大きくピッチが変動し、文末は次末音節でピッチが上昇したのち、下降している。ピッチ変動に比べて、動詞述語のピッチ変動が小さいことが分かる（図 9）。

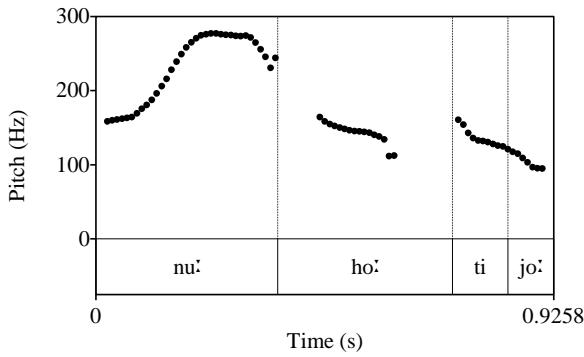


図9 nu[u] ho: [ti]jo: 「何を買ったの？」

## 5. 形態論

### 5.1 品詞

品詞は、「名詞」「動詞」「形容詞」「助詞」「副詞」「連体詞」「感動詞」に分類される。品詞を分類するにあたり、(a) 名詞句の主要部になるか、(b) 名詞句の修飾部のみに現れるか、(c) 存在動詞 *na-*「～ない」と述部を形成するか、(d) 句や節に後接するか、(e) 繰起接辞を取るか、(f) 動詞を修飾するか、の6つを指標として用いる。

表8 品詞の分類

	分布特徴				構造特徴	意味特徴
	名詞句 主要部	名詞句修 飾部のみ	存在動詞 <i>na-</i> と 述部形成 <sup>5</sup>	句や節に 後接		
名詞	+					
連体詞		+				
形容詞			+			+
助詞				+		
動詞					+	
副詞						+
感動詞						

名詞は名詞句の主要部となる。「名詞句」は一般に「項 (argument)」となり、動詞の主語・目的語・間接目的語となる。例えば、(16) の *cjurasanu tui* 「きれいな鳥」は主格助詞=*nu* を取り、*nacjuN* 「鳴く」の主語となるため「名詞句」である。この句のうち、単独で句と置き換えられる語は *tui* 「鳥」であるため、*tui* 「鳥」が主要部であり、「名詞」と考えられる。

<sup>5</sup> 横山 (2017) ではコピュラ述部を認めていたため「コピュラ動詞 *na-*の補部になる」と書いていたが、本稿ではそれを認めないため、「*na-*と述部を形成する」に書き換えた。

- (16) *cjura-sa-nu tui=nu nacj-u-N*  
 きれい-ADJ-ADN 鳥=NOM 鳴く-CONT-IND  
 きれいな鳥が鳴いている。

連体詞は名詞句の主要部にのみ現れる。*anu*「あの」は(17) のように名詞句の修飾部のみに現れるため「連体詞」と考える。同じく名詞句修飾部に現れる語として *aN*「あれ・あの」があるが、これは名詞句の主要部にもなるため「連体詞」ではなく名詞と判断する(18)。

- (17) *anu / aN cjuu=wa takasji=ga tuzji=doo*  
 あの 人=TOP タカシ（人名）=GEN 妻=SFP  
 あの人はタカシの奥さんだよ。
- (18) *aN=ga madu eet-a-N=doo*  
 あれ=NOM 窓 開ける-PST=SFP  
 あの人人が窓を開けたよ。

形容詞は存在動詞 *na-*「ない」と述部を形成する。*hamara-*「うるさい」は、存在動詞 *na-*「ない」と述部を形成するため「形容詞」と考える。名詞述語文も補助動詞で極性を表すが、その場合には補助動詞にコピュラ動詞 *a-*「～だ」の否定形がくるので、区別できる(20)。

- (19) *jiru=wa hamara-sja na-N*  
 夜=TOP うるさい-ADJ ない-IND  
 夜はうるさくない。
- (20) *ari=wa teraza a-ra-N jaazjimabui=doo*  
 あれ=TOP トカゲ COP-NEG-IND ヤモリ=SFP  
 あれはトカゲじゃない。ヤモリだよ。

助詞は句や節に後接する。(21) は *mizjirasjanu cjuu*「面白い人」が、動詞 *uN*「いる」の主語であり、名詞句である。この名詞句の後の *nu* は、それ自体が句頭に立つことはないので、句に後接していると考えられる。この *nu* は(22) *Maani unu cjuu*「そこにいる人」のように名詞節にも後接できる。こうした語を「助詞」とする。

- (21) *mizjira-sja-nu cjuu=nu u-N*  
 面白い-ADJ-ADN 人=NOM いる-IND  
 面白い人がいる。
- (22) *Maa=ni u-nu cjuu=nu takasji=doo*  
 そこ=LOC いる-ADN 人=NOM たかし=SFP

そこにいる人がたかしだよ。

動詞は継起接辞-*i* を接続することが出来る。(23)(a) *abi-*「呼ぶ」, (b) *u-*「いる」, (c) *a-*「～だ」は、いずれも継起接辞-*i* を接続できるため「動詞」と考える。形容詞も動詞と似た屈折をするが、(24) の *hamara-*「うるさい」のように、それ自体が屈折できる訳ではなく、補助動詞が屈折するため、区別できる。

- (23) (a) *abit-i* (b) *ut-i* (c) *at-i*  
呼ぶ=SEQ いる-SEQ COP-SEQ  
呼んで いて ～て
- (24) *jiru=mu hamara-sja at-i nibu-ra-ra-N*  
夜=ADD うるさい-ADJ COP-SEQ 眠る-POT-NEG-IND  
夜もうるさくて、眠れない。

副詞は動詞修飾が出来る。(25) の *icjama*「少し」は動詞 *nibutaN*「眠った」を修飾している。同じく動詞修飾できるものに形容詞があるが、形容詞には“存在動詞 *na-*「ない」と述部を形成する”という統語特徴があり、これは *icjama*「少し」などの語にはないため、区別できる。

- (25) *jiru=wa icjama nibut-a -N*  
夜=TOP 少し 眠る-PST-IND  
夜は少し眠った。

上記すべての特徴がない語を「感動詞」とする。例えば(26)の *abee!*「しまった」は単独で節を形成し、屈折もしないため、表 8 で示した分布特徴や構造特徴をもたない。こうした語を「感動詞」と考える。

- (26) *abee! wana saifu wasjirit-a -N*  
しまった 1SG.TOP 財布 忘れる-PST-IND  
しまった！私は財布忘れた。

また、品詞をまたがる、機能に共通点を持つ語彙群として「指示語」「疑問詞」というカテゴリーが認められる。

## 5.2 名詞形態論

名詞は (a) 文法的に数の標示が義務的か、(b) 語根が自由形態素か、という 2 つの指標によって「普通名詞」「代名詞」「数詞」に分類することが出来る（表 9）。語根が自由形態素で数の標

示が随意的な名詞を「普通名詞」、語根が自由形態素で、数の標示が義務的な名詞を「代名詞」、語根が拘束形態素の名詞を「数詞」とする。

表9 名詞の分類

	語根が自由形態素	数の標示の義務性
普通名詞	+	-
代名詞	+	+
数詞	-	-

### 5.2.1 普通名詞の形態法

普通名詞の形態法には「接辞化」「複合」「重複」がある。

#### 4.2.1.1. 接辞化

普通名詞は、随意的に接頭辞／接尾辞を接続する。接頭辞には美化語 *u-*「お～」や、動物の性別を表す *wuu-*「雄」、*mii-*「雌」がある。接尾辞には、指小辞-*gwa*「小さな～」や、複数接辞-*cja-taa/-Ncja/-naa*「～たち」がある。複数接辞の選択は、ホストとなる名詞の意味によって決定される。この名詞の「意味」は 6.1.2 で詳述する「名詞句階層」で説明することが出来る。

(27) 国頭方言における名詞句階層

1人称 > 2人称非尊 > 2人称尊 > 3人称 > 固有 > 呼称 > 人間 > 動物 > 無生物

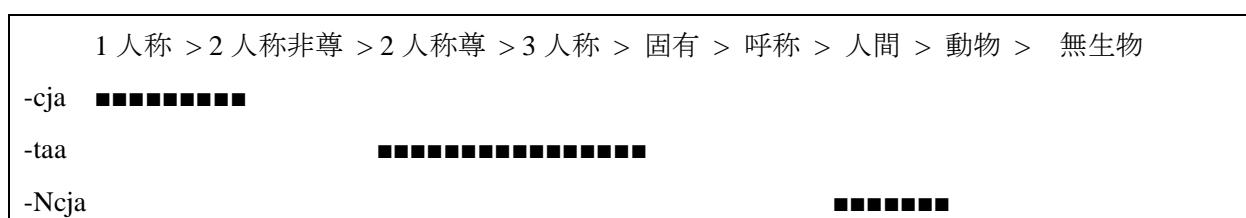


図 10 名詞句階層と複数接辞の関係

名詞が2人称非尊称よりも上位の階層にあるとき-*cja*を、呼称より上位の場合-*taa*を、動物名詞より上位の場合-*Ncja*を取る。無生物名詞は複数接辞を取らない。無生物名詞が複数性を表したい時は、*jaa~jaa*「家々」のように重複形を取る場合がある。再帰代名詞のみ-*naa*を取る。

(28)	<i>wacja</i>	<i>nataaa</i>	<i>taroo-taa</i>	<i>warabi-Ncja</i>	<i>duu-naa</i>
	1PL	2HON.PL	太郎-PL	子ども-PL	REFL-PL
	私達	あなた方	太郎たち	子供たち	自分たち

#### 4.2.1.2. 複合

名詞は 2 つ以上の語根を合わせて語を形成する「複合」という形態法をとる。2 つ以上の語根が含まれる語は複合語と呼ばれる。名詞の複合語には、(a) 名詞語根が 2 つ以上含まれるもの、(b) 動詞語根と名詞語根を含むもの、(c) 形容詞語根と名詞語根を含むもの、がある。

(29) は *basja* 「芭蕉」と *umu* 「芋」が複合して *basjaumu* 「バナナ」、(30)は動詞 *kam-* 「食べる」の連用形と名詞 *muN* 「もの」が複合して *kamimuN* 「食べ物」、(31)は形容詞 *cjura-* 「きれい」の語根と名詞 *kwaa* 「子ども」が複合して *cjuragwaa* 「綺麗な子」という複合語を形成している。

(29) <i>basja+umu</i>	(30) <i>kam-i+muN</i>	(31) <i>cjura+gwaa</i>
芭蕉 + 芋	食べる -INF + もの	きれい + 子
バナナ	食べ物	綺麗な子

#### 4.2.1.3. 重複

名詞は、語根を繰り返す「重複 (reduplication)」という形態法をとる。接辞化や複合に比べて生産性は少ないが、一部の名詞が「複数性」を表すために重複を用いる。重複を取り得るのは無生物名詞と、疑問代名詞 *taru/taN* である。

(32) は *jaa* 「家」を、(33)は *taru* 「誰」を、(34)は *uduru* 「どれ」を重複して、いずれも複数性を表している。疑問代名詞の重複が複数性を表す例は、中古・中世日本語にはあるが<sup>6</sup>、現代日本語にはない用法である。

(32) <i>jaa~jaa</i>	(33) <i>taru~taru</i>	(34) <i>uduru~uduru</i>
家~RED	誰~RED	どれ~RED
家々	誰 (複数)	どれ (複数)

### 5.2.2 代名詞

代名詞は、名詞や名詞句の代わりに、事物や人などを表す語である。それが代用する名詞によって、(a) 人称代名詞、(b) 指示代名詞、(c) 疑問代名詞、(d) 再帰代名詞の 4 つに分類できる。

#### 4.2.2.1. 人称代名詞

人称代名詞は表 10 の通りである。2 人称には目下や同輩に用いる「非尊称」の形式と、目上に用いる「尊称」の形式に区別がある。3 人称は指示代名詞の形式をそのまま用いる。

<sup>6</sup> 小学館. "たれたれ【誰誰】"精選版日本国語大辞典. <https://www.weblio.jp/content/%E3%81%9F%E3%82%8C%E3%81%9F%E3%82%8C> (2021/11/10 閲覧)

表 10 人称代名詞

人称	尊称	単数	双数	複数
1人称		waN, waa, wana 「私」	watee 「私達二人」	wacja 「私達」
2人称	非尊称	ura 「あんた」 <sup>7</sup>	utee 「あんた達二人」	ucja 「あんた達」
	尊称	nata 「あなた」		natataa 「あなた達」
3人称		furi/fuN, uri/uN, ari/aN 「あの人」	natee 「あの人たち二人」	furitaa/fuNtaa, uritaa/uNtaa, aritaa/aNtaa 「あんた達」

人称代名詞は数の区別が義務的で、1人称、2人称（非尊称形）には「単数／双数／複数」の区別があり、2人称（尊称）と3人称には「単数／複数」の区別がある。また、3人称には *natee* 「あの人たち二人」という語源不明の双数形がある。双数形の区別があるのは、琉球諸語の中でも奄美諸方言だけに見られる特徴である。

(35)は昔話の中で、二人の男が話しているシーンである。それぞれの家に子供が生まれたことについて、*watee=ga jaa* 「私達ふたりの家（お互いの家）」という言い方をしている。

- (35) *watee=ga jaa=ni kwaa=nu Maarit-i hoora-sja=jaa*  
 2DU=GEN 家=LOC1 子=NOM 生まれる-SEQ 嬉しい-ADJ=SFP  
 私達の家に子供が生まれて嬉しいね。

#### 4.2.2.2. 指示代名詞

指示代名詞には、指示対象として人や物を指すものと、場所を指すものがある。自分の近くを指す「近称」、自分から少し遠くや相手の近くを指す「中称」、話者と相手のどちらからも遠い「遠称」の3つの区別がある。

表 11 指示代名詞の体系

	近称	中称	遠称	疑問
人・物	<i>furi/fuN</i> 「これ」	<i>uri/uN</i> 「それ」	<i>ari/aN</i> 「あれ」	<i>uduru/uduN</i> 「どれ」
場所	<i>maa</i> 「ここ」	<i>Maa</i> 「そこ」	<i>ama</i> 「あそこ」	<i>uda</i> 「どこ」

#### 4.2.2.3. 疑問代名詞

疑問代名詞は疑問の対象により、*taru/taN* 「誰」, *nuu* 「何」, *uda* 「どこ」, *uduru* 「どれ」, *icji* 「いつ」などの形式がある。*taru/taN*, *uduru* は接辞化と重複により複数を表す（表 12）。

<sup>7</sup> 標準語の「あんた・お前」はぞんざいな意味を含むが、国頭方言の2人称非尊称にはそこまでのぞんざいな語感はない。ただ、訳としては「あんた」が話者に好まれるため、「あんた」としている。

表 12 疑問代名詞

疑問の対象	単数	複数
人間	<i>taru/taN</i> 「誰」	<i>tarutaa/taNtaa, tarutaru/taNtaN</i>
物	<i>nuu</i> 「何」	
場所	<i>uda</i> 「どこ」	
選択肢	<i>uduru/uduN</i> 「どれ／どっち」	<i>uduru'uduru</i>
時間	<i>icji</i> 「いつ」	

#### 4.2.2.4. 再帰代名詞

再帰代名詞には *duu* 「自分」がある。*duu* 「自分」は節内の主語を照応対象とする。*duu* の複数形は、複数接辞-*naa* を取った *duu-naa* である。複数を標示する際に-*naa* を取るのは再帰代名詞のみである。(36)は、*duu* 「自分」が、既出の主語 *nira=nu kamisama* 「ニラの神様」を照応している

- (36) *nira=nu      kamisama=wa      duu      cjui=sji      izj-a-N*  
 ニラ=GEN    神様=TOP      1REFL    1人=INS    行く-PST-IND  
 ニラの神様は自分 (=ニラの神様) 1人で行った。

#### 5.2.3 数詞

数詞の構造は(37)のように、数を表す語幹に、類別詞となる屈折接尾辞を接続して形成される。国頭方言の数詞は、日本標準語の基数（「ひい」「ふう」「みい」など）と異なり、語幹のみで使えるものが多く、名詞の中で特殊な存在である。しかし、名詞句の主要部になることから、名詞の下位分類とした。次頁の表 13 は主な数詞をまとめたものである。

#### (37) 語幹一類別接辞

日本語と比べて特徴的なのは、「～つ（個）」にあたる-*cji* の用法が非常に広いことである。-*cji* は「～つ（個）」と異なり、小さなものだけではなく、広く非生物や動物名詞も表す(38)。

- (38) *?waa mii-cji cjikanoot-ut-a-N*  
 豚      3-つ      飼う-CONT-PST-IND  
 豚を三匹飼っていた。

表 13 数詞

	形式	～つ (匹／個)	～人 <sup>8</sup>	～回	～日
1	ti/cju	ti-cji	cju-i	cju-kkee	cjii
2	ta(a)	taa-cji	ta-i	ta-kkee	hucji-ka
3	mi(i)	mii-cji	mi-cjai	mi-kkee	mi-cjaa
4	ju(u)	juu-cji	ju-tai	ju-kkee	ju-waa/ju-faa
5	icji	icji-cji		icji-kee	icji-kaa
6	mu(u)	muu-cji		mu-kkee	mui-ka
7	nana	nana-cji		nana-kee	nanu-kaa/naN-kaa
8	ja(a)	jaa-cji		ja-kkee	jaa
9	ku(ku)nu	kukunu-cji		kunu-kee	kukunu-kaa
10	tu(u)	tuu		tu-kkee	tu-kcaa/tuu

### 5.3 動詞形態論

#### 5.3.1 動詞の語形成

##### 4.3.1.1. 内部構造

動詞は語根と接辞によって構成される。接辞の承接順は(39)のように表せる。このうち、語根と語尾接辞が必須の要素である。使役接辞は-ras-, 受動接辞は-ra-, 丁寧接辞は-jabu-, 繼続接辞は-u-である。極性接辞には-ran- (否定 1) と, -radana- (否定 2) がある。「時制接辞」には-ju- (非過去), -a (過去), -juta (過去 2) がある。語尾接辞には(40)のような接辞がある。語尾接辞が表すムードについては、7.3 に記述している。

##### (39) 動詞の内部構造

語根（一使役接辞一受動接辞一丁寧接辞一継起接辞一極性接辞一時制接辞）一語尾接辞

##### (40) 語尾接辞

-N (直説), -mu (認識), -ru (係り結び), -nu (連体), -e (肯否疑問), -i (疑問詞疑問), -sjiga (逆接), -sa (意外性), -sji (補文), -maze (確認), -riba (条件 1), -rja (条件 2), -ru (条件 3), -raa (意図), -ri (命令), -runa (禁止), -i (継起), -i (連用 1), -iN (連用 2), -taja (並列)

##### 4.3.1.2. 派生接辞と屈折接辞

接辞は、屈折接辞 (inflectional affix) と派生接辞 (derivational affix) に分類される。一般に派生接辞は品詞や構文を変化させる接辞であり、屈折接辞は「時制」「性」など文法的なカテゴリ

<sup>8</sup> 5 人以降は「ごにん, ろくにん...」と標準語と同形式になる。

一を表す接辞である。本論文では、動詞の内部に現れる接辞のうち、結合価を変化させる（構文を変化させる）使役接辞-ras-、受動接辞-ra-を派生接辞、それ以外の接辞は屈折接辞と考える。

#### 4.3.1.3. 接辞の共起制限

接辞には、共起できないものがある。共起制限があるものについて、(41) にまとめる。

##### (41) 接辞の共起制限

- a) 以下の語尾接辞は、時制の接辞（過去1接辞：-a、非過去接辞：-ju-、過去2接辞-juta）と共に起できない  
-raa（意図）、-i（継起）、-ri（命令）、-i（連用）、-iN（連用2）、-runa（禁止）、-taja（並列）
- b) 以下の屈折接辞は、非過去接辞と共に起できない  
-riba（条件1）、-rja（条件2）、-ru（条件3）、-jabu-（丁寧）、-u-（継続）、-ran-（否定）
- c) 以下の屈折接辞は否定接辞と共に起出来ない  
-ri（命令）、-runa（禁止）、-ju-（非過去）

#### 4.3.1.4. 語幹と語基

動詞の屈折について説明するために、動詞の内部について、2つの単位を認定する。まず、語から屈折接辞を除いた部分は「語幹 (stem)」と呼ぶ。これに対して、接辞側からみて、接辞が接続する先の要素全体を「語基 (base)」と呼ぶ。

(42) 語幹 (stem) : 語から屈折接辞を取った部分

(43) 語基 (base) : 接辞が接続する先の要素全体

例えば、動詞 *abirataN* 「呼ばれた」は、語根 *abi-* 「呼ぶ」に、派生接辞-*ra-*（受動）、屈折接辞-*a*（過去）、屈折接辞-*N*（直説）が接続して構成されている。

この動詞の語幹は、屈折接辞が接続する *abi-rat-* である。一方で、語基は接辞ごとに指定され、-*N* に対する語基は *abirata*、-*a*（過去）に対する語基は *abirat* と考える。

(44) *abi-rat-a-N*

呼ぶ-PASS-PST-IND

呼ばれた

#### 4.3.1.5. 語基交替規則

動詞は、*hak-i*「書け」，*hacj-i*「書いて」のように、後ろにつく接辞によって語基の末尾音が規則的に交替する。表 14において、A に分類される接辞は「語基タイプ A」，B に分類される接辞は「語基タイプ B」，C に分類される接辞は「語基タイプ C」の形式に接続する。「その他」に属する接辞は、語基末尾音の交替に関与しない。

表 14 接辞の分類

接辞のグループ	形式	機能	グロス
A	-ras-	使役「～させる」	CAUS
	-ra-	受動／可能「～られる／～できる」	PASS/POT
	-ran-	否定「～ない」	NEG
	-radana-	否定 2 「～なかつ（た）」	NEG2
	-radana	否定継起「～なくて」	NEG.SEQ
	-raNko	否定継起 2 「～なくて」	NEG.SEQ
	-ri	命令「～しろ」	IMP
	-raa	意志「～しよう」	INT
	-runa	禁止「～するな」	PROH
	-riba	条件 1 「～ば」	COND1
	-rja	条件 2 「～ば」	COND2
	-ru	条件 3 「～と」	COND3
B	-ju-	非過去「～る」	NPST
	-juta	過去 2 「～よった」	PST2
	-i	連用	INF
	-iN	連用 2	INF2
	-jabu-	丁寧	POL
C	-a	過去 1	PST
	-u-	継続	CONT
	-i	継起	SEQ
その他／C	-e	肯否疑問	YNQ
	-i	疑問	Q
その他	上記以外の接辞全て		

語基タイプによる語基末尾音の違いは表 15 の通りである。表中の V は母音を表す。なお、語基 A を形成する語根や接辞を「基底形」と考える。語基 A を形成する形式を「基底形」とするのは、最も形式の対立が多く、歴史的に古い形式だと考えられるためである。

表 15 語基末尾音の交替

語基のタイプ	語基の末尾音								
語基 A	V	s	n	k	t	g	m	b	#Ci
語基 B	V	s	n	c	c	z	m	b	#Ci
語基 C	Vt	cj	z	cj	cj	zj	d	d	#Cicj

例えば、母音語根 *abi-* 「呼ぶ」が命令接辞-*ri*を接続する時を考える。命令接辞を接続するのは語基 A タイプなので、語基の末尾音は V (*abi*)となる。そこで、語基 A タイプに命令接辞が接続し「呼べ」 *abi-ri*となる。一方、*abi-* 「呼ぶ」が継起接辞を接続する時は、継起接辞-*i*に接続するのは語基 C タイプなので、語基末は Vt (*abit*)となる。そこで語基 C タイプに継起接辞が接続し「呼んで」 *abit-i*となる。

s 語根 *nas-* 「産む」の場合は、グループ A の接辞に接続する語基は s 終わりなので、命令形は *nas-i* 「産め」となる。グループ C に接続する語基は cj 終わりなので、継起形は *nacj-i*となる。

それぞれの語基末尾音を持つ語根の交替について、具体例を表 16 に挙げる。

表 16 語基交替例

( )内は、(46)で述べる形態音韻規則を受けた後の形式を表す

語基末尾音	V <sub>1</sub>	s	n	k	t
語根	<i>abi-</i> 「呼ぶ」	<i>nas-</i> 「産む」	<i>sjin-</i> 「死ぬ」	<i>cjik-</i> 「聞く」	<i>mat-</i> 「待つ」
A (命令-ri)	<i>abi-ri</i>	<i>nas-i</i> (→ <i>nasji</i> )	<i>sjin-i</i>	<i>cjik-i</i>	<i>mat-i</i>
B (連用-i)	<i>abi-i</i> (→ <i>abi</i> )	<i>nas-i</i> (→ <i>nasji</i> )	<i>sjin-i</i>	<i>cjic-i</i> (→ <i>cjicji</i> )	<i>mac-i</i> (→ <i>macji</i> )
C (継起-i)	<i>abit-i</i>	<i>nacj-i</i>	<i>sjiz-i</i> (→ <i>sjizji</i> )	<i>cjicj-i</i>	<i>macj-i</i>

語基末尾音	g	m	b	#Ci
語根	<i>uig-</i> 「泳ぐ」	<i>kam-</i> 「食べる」	<i>asjib-</i> 「遊ぶ」	<i>mi-</i> 「見る」
A (命令-ri)	<i>uig-i</i>	<i>kam-i</i>	<i>asjib-i</i>	<i>mi-ri</i> (→ <i>mii</i> )
B (連用-i)	<i>uiz-i</i> (→ <i>uizji</i> )	<i>kam-i</i>	<i>asjib-i</i>	<i>mi-i</i>
C (継起-i)	<i>uizj-i</i>	<i>kad-i</i>	<i>asjid-i</i>	<i>micj-i</i>

語根よりも大きい語基、例えば、語根に派生接辞-ras-が接続した場合 *abi-ras-*も、語基交替規則に則って交替する。すなわち、命令接辞-*ri* (語基 A グループ) の前では *abiras-i* 「呼ばせろ」だが、継起接辞-*i* (語基 C グループ) の前では *abiracj-i* 「呼ばせて」となる。

#### 4.3.1.6. 形態音韻規則

動詞が語形成される際に、(45) のような音韻規則、(46) のような形態音韻規則が適用される。

##### (45) 音韻規則

動詞の屈折に関する音韻規則は以下の通りである。

- a)  $si \rightarrow sji$  : si は sji となる。

(ex)	nas	+	-i	$\rightarrow$	nasj-i
	生む		INF		生む-INF

- b)  $ci \rightarrow cji$  : ci は cji となる。

(ex)	cjic	+	-i	$\rightarrow$	cjicj-i
	聞く		INF		聞く-INF

- c)  $zi \rightarrow zji$  : zi は zji となる。

(ex)	uiz	+	-i	$\rightarrow$	uizj-i
	泳ぐ		INF		泳ぐ-INF

##### (46) 形態音韻規則

- a)  $r \rightarrow \emptyset / C_-$  : 子音後の r は削除される。

(ex)	hak	+	-ras-	+	-ju-	+	-N	$\rightarrow$	hak-as-ju-N
	書く		CAUS		NPST		IND		書く-CAUS-NPST-IND

- b)  $ju \rightarrow i / \{m, b\}_-$  : m,b の後の ju は i になる。

(ex)	kam	+	-ju-	+	-N	$\rightarrow$	kam-i-N
	食べる		NPST		IND		食べる-NPST-IND

- c)  $n \rightarrow \emptyset / _C$  : 子音前の n は削除される。

(ex)	abi	+	-ran-	+	-mu	$\rightarrow$	abi-ra-mu
	呼ぶ		NEG		EPI		呼ぶ-NEG-EPI

d)  $ru \rightarrow N / _n : ru$  は  $n$  の前で  $N$  となる

(ex) abi + -runa → abi-runा → abi-Nna  
 呼ぶ PROH 呼ぶ-PROH 呼ぶ-PROH

e)  $r \rightarrow \emptyset / \#Ci_{\{a,i\}}$  :  $i$  で終わる 1 モーラの語幹と,  $a$  または  $i$  の間に挟まれる  $r$  は削除される。

(ex) mi + -riba → mi-iba  
 見る COND 見る-COND

f)  $\#Ci(j)V \rightarrow \#CjVV$  : 語頭の  $CiV$  または  $CijV$  の連続は  $CjVV$  になる。

(ex) mi + -jabu- -N → m-jaabu-N  
 見る POL IND 見る-POL-IND

g) 語末から 2 つ目の母音は, 後続する母音の開口度に同化する。

(ex) abi + -ju- + -e → abi-jo-e  
 呼ぶ NPST YNQ 呼ぶ-NPST-YNQ

h) \*(CC)VVN : 超重音節は禁止される。

(ex) sji + -ju- -N → sjuuN → sjuN  
 する NPST IND 規則 f 規則 h する

### 5.3.2 動詞の種類

動詞は形態統語的な差異から (a) 動作動詞, (b) 存在動詞, (c) コピュラ動詞に分類される (表 17)。動作動詞は継続接辞 (CONT) を取れるが, 他の動詞はそれを取れない。コピュラ動詞は, 名詞と述部を形成するが, 他の動詞語根はそれができない。

表 17 動詞の分類

	-u- (継続接辞) の接続	名詞述部の形成
(a) 動作動詞	+	-
(b) 存在動詞	-	-
(c) コピュラ動詞	-	+

#### 4.1.2.1. 動作動詞

動作動詞の語形成は、5.3で述べた通りである。主な活用形を表18、表19、表20に挙げる。なお、左端の記号は、5.3.1で説明した「語基交替規則」の元となる、接辞のグループを表す。

表18 動作動詞の活用形(1)

		語根末	-V	-s	-n
		意味	呼ぶ	消す	死ぬ
		語根	abi-	cjaas-	sjin-
A	使役	CAUS	-ras-	abi-racj-a-N	sjin-asacj-a-N
	受動・可能	PASS	-ra-	abi-ra-ju-N	sjin-a-ju-N
	否定1	NEG1	-ran-	abi-ra-N	sjin-a-N
	否定2	NEG2	-radana-	abi-radananat-a-N	sjin-adanat-a-N
	否定継起	SEQ2	-radana	abi-radana	sjin-adana
	否定継起2	NEG.SEQ2	-raNko	abi-raNko	sjin-aNko
	命令	IMP	-ri	abi-ri	sjin-i
	意志	INT	-raa	abi-raa	sjin-aa/sjinj-aa
	禁止	PROH	-runa	abi-Nna	sjin-una
	条件1	COND1	-riba	abi-riba	sjin-iba/cjaasriba
	条件2	COND2	-rja	abi-rja	sjin-ja
	条件3	RU	-ru	abi-ru	sjin-u
B	非過去	NPST	-ju-	abi-ju-N	sjin-ju-N
	過去2	PST2	-juta-	abi-juta-N	sjin-juta-N
	連用1	INF	-i	ab-i	sjin-i
	連用2	INF2	-iN	ab-iN	sjin-iN
	丁寧	POL	-jabu-	abi-jabu-N	sjin-(i) jabu-N
C	過去1	PST	-a-	abit-a-N	sjizj-a-N
	継続	CONT	-u-	abit-u-N	sjizj-u-N
	継起	SEQ1	-i	abit-i	sjizj-i
他/C	肯否疑問	YNQ	-e	abi-jo-e	sjin-jo-e
	疑問	Q	-i	abi-ju-i	sjin-ju-i
他	直説	IND	-N	abi-ju-N	sjin-ju-N
	連体	ADN	-nu/N	abi-ju-nu	sjin-ju-N/nu
	証拠	EMPH	-mu	abi-ju-mu	sjin-ju-mu
	係り結び	MSB	-ru	abi-ju-ru	sjin-ju-ru
	確認	CONF	-mazee	abi-ju-mazee	sjin-ju-mazee

表 19 動作動詞の活用形 (2)：左端の記号は「語基交替規則」の元となる、接辞のグループ

	語根末	-k	-t	-g	-m
	意味	書く	待つ	漕ぐ	食べる
	語根	hak-	mat-	fuug-	kam-
A	使役	hak-as-ju-N	mat-as-ju-N	fuug-as-ju-N	kam-as-ju-N
	受動・可能	hak-a-ju-N	mat-a-ju-N	fug-a-ju-N	kam-a-ju-N
	否定 1	hak-a-N	mat-a-N	fug-a-N	kam-a-N
	否定 2	hak-adanat-a-N	mat-adanat-a-N	fug-adanat-a-N	kam-adanat-a-N
	否定継起	hak-adana	mat-adana	fuug-adana	kam-adana
	否定継起 2	hak-aNko	mat-aNko	fuug-aNko	kam-aNko
	命令	hak-i	mat-i	fug-i	kam-i
	意志	hak-aa	mat-aa	fug-aa	kam-aa
	禁止	hak-una	mat-una	fug-una	kam-una
	条件 1	hak-iba	mat-iba	fug-iba	kam-iba
B	条件 2	hak-ja	mat-ja	fuug-ja	kam-ja
	条件 3	hak-u	mat-u	fuug-u	kam-u
	非過去	hac-ju-N	mac-ju-N	fuz-ju-N	kam-i-N
	過去 2	hac-juta-N	mac-juta-N	fuz-juta-N	kam-ita-N
	連用 1	hac-i	mac-i	fuzj-i	kam-i
C	連用 2	hac-iN	mac-iN	fuuzj-iN	kam-iN
	丁寧	hac-i-jabu-N	mac-jabu-N	fuuz-jabu-N	kam-jaabu-N kamijabuN
他／C	過去 1	hacj-a-N	macj-a-N	fuuzj-a-N	kad-a-N
	継続	hacj-u-N	macj-u-N	fuuzj-u-N	kad-u-N
	継起	hacj-i	macj-i	fuuzj-i	kad-i
他	肯否疑問	hac-jo-e	mac-jo-e	fuuz-jo-e	kam-e-e
	疑問	hac-ju-i	mac-ju-i	fuuz-ju-i	kam-i
他	直説	hac-ju-N	mac-ju-N	fuz-ju-N	kam-i-N
	連体	hac-ju-N/nu	mac-ju-N/nu	fuz-ju-N/nu	kam-i-N/nu
	証拠	hac-ju-mu	mac-ju-mu	fuuz-ju-mu	kam-mu
	係り結び	hac-ju-ru	mac-ju-ru	fuuz-ju-ru	kam-ru
	確認	hac-ju-maze	mac-ju-maze	fuuz-ju-maze	kam-i-mazee

表 20 動作動詞の活用形 (3) : 左端の記号は「語基交替規則」の元となる、接辞のグループ

	語根末	-m	-b	#Ci
	意味	食べる	遊ぶ	見る
	語根	kam	asjib	mi
A	使役	kam-as-ju-N	asjib-as-ju-N	(mi-as-ju-N → mi-as-ju-N →) mj-aas-ju-N
	受動・可能	kam-a-ju-N	asjib-a-ju-N	(mi-ra-ju-N → mi-aa-ju-N →) mj-aa-ju-N
	否定 1	kam-a-N	asjib-a-N	(mi-ran-N → mi-a-N →) mj-aa-N
	否定 2	kam-adanat-a-N	ajib-adanat-a-N	(mi-radanat-a-N → mi-adanat-a-N →) mj-aadanat-a-N
	否定継起	kam-adana	asjib-adana	(mi-radana → mi-adana →) mj-aadana
	否定継起 2	kam-aNko	ajib-aNko	(mi-raNko → mi-aNko →) mj-aaNko
	命令	kam-i	asjib-i	(mi-ri →) mi-i
	意志	kam-aa	asjib-aa	(mi-raa → mi-aa →) mj-aa
	禁止	kam-una	asjib-una	mi-runa
	条件 1	kam-iba	asjib-iba	(mi-riba →) mi-iba
B	条件 2	kam-ja	asjib-ja	mi-rja
	条件 3	kam-u	asjib-u	mi-ru
	非過去	kam-i-N	asjib-i-N	m-ju-N
	過去 2	kam-ita-N	asjib-ita-N	m-juuta-N
	連用 1	kam-i	asjib-i	m-ii
C	連用 2	kam-iN	ajib-iN	m-iN
	丁寧	kam-jaabu-N kam-i-jabu-N	asjib-jaabu-N	m-jaabu-N
他 / C	過去 1	kad-a-N	asjid-a-N	micj-a-N
	継続	kad-u-N	asjid-u-N	micj-u-N
	継起	kad-i	asjid-i	micj-i
他 / C	肯否疑問	kam-e-e	asjib-e-e	m-joo-e
	疑問	kam-i	asjib-i	m-ju-i
他	直説	kam-i-N	asjib-i-N	m-ju-N
	連体	kam-i-N/nu	asjib-i-N/nu	m-ju-N/nu
	証拠	kam-mu	asjib-i-mu	m-juu-mu
	係り結び	kam-ru	?	m-juu-ru
	確認	kam-i-mazee	asjib-i-mazee	m-ju-mazee

#### 4.1.2.2. 存在動詞

生物やモノの存在・非存在を表す動詞を「存在動詞」と呼ぶ。形態的に、(a) アスペクトの接辞を取りれない点、(b) 非過去時制が標示されない点が、動作動詞と異なる。

人・動物の存在を表す動詞に *u-* 「いる」、植物・モノの存在を表す動詞に *a-* 「ある」、植物・モノの非存在を表す動詞に *na-* 「ない」がある。存在動詞の *aN* 「ある」の否定形は *naN* 「ない」であり、コピュラ動詞の *aN* 「～だ」の否定形 *araN* 「～じやない」と区別される。主な活用形を表21に挙げる。

表 21 存在動詞の活用形：左端の記号は「語基交替規則」の元となる、接辞のグループ

	機能	形式	<i>a-</i> 「ある」	<i>u-</i> 「いる」	<i>na-</i> 「ない」
	使役	-ras-	a-ras-ju-N	u-ras-ju-N	-
	受動・可能	-ra-	a-ra-ju-N	u-ra-ju-N	-
A	否定 1	-ran-	(naN)	u-ra-N	(na-ran-N →) naN
	否定 2	-radana-	(naadanataN)	u-radana-t-a-N	(na-radana-t-a-N →) naadanataN
	否定継起	-radana	(naadana)	u-radana	(na-radana →) naadana
	命令	-ri	a-ri	u-ri	-
	意志	-raa	a-raa	u-raa	-
	禁止	-runa	a-runna	u-Nna	-
	条件 1	-riba	a-riba	u-riba	-
	条件 2	-rja	a-rjaa	u-rja	(na-ran-rja →) naNnja
	条件 3	-ru	a-ru	u-ru	-
B	連用 1	-i	a-i	u-i	-
	丁寧	-jabu-	a-jabu-N	u-jabu-N	(na-jabu-ra-N →) naaburaN
C	過去 1	-a-	at-a-N	ut-a-N	(na-radana-t-a-N →) naadanataN
	継起	-i	at-i	ut-i	(na-raz-i →) naazji
他／C	肯否疑問	-e	a-e	o-e	(na-ran-e →) naaze
	疑問	-i	a-i	u-i	-
他	直説	-N	a-N	u-N	(na-ran-N →) naN
	連体	-nu/N	a-nu	u-nu	(na-ran-nu →) naanu
	認識	-mu	a-mu	u-mu	(na-ran-mu →) naamu
	意外性	-sa	aa-saa	uu-saa	naa-saa
	係り結び	-ru	a-ru	u-ru	-

#### 4.1.2.3. コピュラ動詞

名詞と共に述部を形成する動詞をコピュラ動詞とする。コピュラ動詞には、活用しない *ai* 「～でない」と、活用変化がある *a-, ja-* 「～だ」がある。*a-, ja-* 「～だ」は基本的に代替可能だが、*ja-* はとれる接辞が限られている。主な活用形を表 22 にまとめる。

表 22 コピュラ動詞の主な活用形：左端の記号は「語基交替規則」の元となる、接辞のグループ

	機能	形式	ja- 「～だ」	a- 「～だ」
A	使役	-ras-	-	-
	受動・可能	-ra-	-	-
	否定 1	-ran-	-	a-ra-N
	否定 2	-radana-	-	a-radanat-a-N
	命令	-ri	-	-
	意志	-raa	-	-
	禁止	-runa	-	-
	条件 1	-riba	ja-riba	a-riba
	条件 2	-rja	ja-rja	a-rja
B	条件 3	-ru	ja-ru / ja-N	a-ru
	連用 1	-i	ja-i	a-i
	丁寧	-jabu-	-	a-jabu-N
C	過去	-a-	jat-a-N	at-a-N
	継起 1	-i	jat-i	at-i
	継起 2	-radana-	-	a-radama
他／C	肯否疑問	-e	(jat-e-e)	a-e
	疑問詞疑問	-i	-	a-i
他	直説	-N	ja-N (=tuni)	a-N (=tuni)
	連体	-nu/N	jaa-nu	a-nu
	認識	-mu	-	a-mu
	意外性	-sa	jaa-saa	aa-saa
	係り結び	-ru	ja-ru	a-ru

#### 5.3.3 不規則変化

ここまで述べた規則では、活用が説明できないものを「不規則動詞」と呼ぶ。不規則動詞には「する」「行く」「来る」がある。不規則動詞の活用形を表 23 に挙げる。

表 23 不規則動詞の活用形

	機能	形式	「する」	「行く」	「来る」
A	使役	-ras-	sji-ras-ju-N	ik-as-ju-N	fuu-ras-ju-N
	受動・可能	-ra-	sji-ra-ju-N	ik-ju-N	fuu-ra-ju-N
	否定 1	-ran-	sji-ra-N	ik-a-N	fuu-ra-N
	否定 2	-radana			
		-	sji-radanaat-a-N	ik-adanat-a-N	fuu-radanaat-a-N
	否定継起	-radana	sji-radana	ik-adana	fuu-radana
		-ri	sji-ri	ik-i	fuu
	意志	-raa	sji-raa	ik-aa	-
	禁止	-runa	sji-Nna	ik-una	ku-Nna
	条件 1	-riba	sji-riba	ik-iba	ku-riba
B	非過去	-ju-	(sji-ju-N→) sjuN	ic-ju-N	(cji-ju-N)→cjuN
	過去 2	-juta-	(sji-juta-N→) sjuutaN	ic-juta-N	(cji-juta-N)→ cjuutaN
	連用 1	-i	sji-i	ic-i	cji-i
	丁寧	-jabu-	(sji-jabu-N→) sjaabuN	ic-jabu-N	(cji-jabu-ra-N →) cjaaburaN
C	過去 1	-a-	(sji-a-N→) sjaN	izj-a-N	kicj-a-N
	継続	-u-	(sji-ju-N→) sjuN	izj-u-N	kicj-u-N
	継起	-i	sji-i	izj-i	kicj-i
C ＼ 他	肯否疑問	-e	(sji-ju-e→) sjoe	(ic-ju-e→) ic-jo-e	(cji-ju-e→) cjoe
	疑問	-i	(sji-ju-i→) sjui	(ic-ju-i→) ic-ju-i	(cji-ju-i→) cjui
他	直説	-N	(sji-ju-N→) sjuN	ic-ju-N	(cji-ju-N→) cjuN
	連体	-nu/N	(sji-ju-nu→) sjuunu	ic-ju-nu	(cji-ju-nu →) cjuunu
	認識	-mu	(sji-ju-mu→) sjuumu	ic-ju-mu	(cji-ju-mu →) cjuumu
	意外性	-sa	(sji-ju-sa→) sjuusa	ic-ju-sa	(cji-ju-sa→) cjuusa
	係り結び	-ru	(sji-ju-ru→) sjuru	ic-ju-ru	(cji-ju-ru→) cjuuru

#### 5.4 形容詞形態論

通常語的に、形容詞は名詞や動詞ほど明瞭な文法カテゴリーではないと言われる。何故なら多くの言語において、形容詞は動詞的な側面と名詞的な側面を持ち、形容詞のみに認められる文法

機能は存在しないからである (Hajek 2006)。こうしたなか, Dixon (2004) はすべての言語において形容詞を動詞や名詞から区別できるとし, 以下の 4 つを類型的な形容詞の特徴として挙げた。

(47) Dixon (2004) による形容詞の類型的特徴

- a. 形容詞は一項文の述語 (intransitive predicate) として機能するか, コピュラの補部 (copula complement) となる。
- b. 形容詞は名詞句の修飾部に立つ。
- c. 形容詞は比較構文を形成する。
- d. 形容詞はそのままの形, または派生して動詞を修飾する。

このうち, 国頭方言の形容詞は a, b, d の特徴を有する。a の「一項文の述語として機能する」は一部の動詞と同じ特徴であり, 「コピュラの補部となる」は名詞的な特徴である。b 「名詞句の修飾部に立つ」特徴は動詞にも当てはまり, d 「動詞を修飾する」特徴は副詞にも当てはまる。しかし, これら全ての特徴を 1 つの語に持つことは他の品詞にはない。このため, (47)a, b, d の全ての特徴を持つことを基準に, 形容詞を他の品詞から区別することが出来る。改めて, 国頭方言の形容詞の認定基準を(48)のように定める。

(48) 国頭方言における形容詞の認定基準

- a. 一項文の述語となるか, コピュラの補部となる。
- b. 名詞句の修飾部に立つ。
- c. そのままの形で動詞を修飾する。

### 5.4.1 形容詞の内部構造

#### 4.3.1.1. 単独形と融合形

国頭方言の形容詞は, 一つの語根に対して(a), (b) の 2 つの構造がありうる。

(a) 単独形式 : 語根 - 形容詞接辞 (例 : *cjura-sa* 「きれい」)

(b) 融合形式 : 語根 - 形容詞接辞 - 語尾接辞 (例 : *cjura-sa-N* 「きれい」)

(b) 融合形式は, 歴史的に単独形式と存在のコピュラ動詞 *a-*が融合して出来た形式である。この融合は完遂しておらず, (49)a の融合形式は, (49)b の「単独形式とコピュラ動詞」の句に言いなおすことが出来る。2 つの形式が現れる統語環境は, 表 24 のようにまとめられる。

(49) a	<i>cjurasaN</i>	<i>b</i>	<i>cjurasa</i>	<i>aN</i>
	きれい-ADJ-IND		きれい-ADJ	COP-IND
	きれい		きれい	

表 24 形容詞の 2 形式と統語的位置

	一項文の述語	コピュラ補部	名詞句修飾部	動詞修飾
(a) 単独形式	✓	✓	-	✓
(b) 融合形式	✓	-	✓	-

#### 4.3.1.2. 形容詞接辞の 2 つの形式

形容詞接辞には $-sa$  と $-sja$  の 2 つの形式があり、語彙ごとに選択される（表 25）意味の傾向として、 $-sa$  を取る形容詞（以下、 $-sa$  形容詞と呼ぶ）には「事物の性質や状態」を表現する語彙が多く、 $-sja$  を取る形容詞（以下、 $sja$  形容詞と呼ぶ）には「人の感情や状態」を表すものが多い<sup>9</sup>。ただし、 $sa$  形容詞に *nizjosa* 「かわいそうだ」 *nuNgisa* 「恐ろしい」 があるなど、反例もある。

表 25 形容詞接辞と所属語彙の例（語幹形式を表示）

所属語彙
$-sa$ amasa 「甘い」, harasa 「塩辛い」, nizjosa 「苦い」, masa 「美味しい」, ususa 「薄い」, kujusa 「濃い」, kurusa 「苦しい」, nizjosa 「かわいそうだ」, nuNgisa 「恐ろしい」, hajosa 「かゆい・くすぐったい」, acjisa 「暑い・熱い」, sjidasa 「涼しい」, hjiisa 「寒い・冷たい」, nurusa 「ぬるい」, kurasa 「暗い」, akarusa 「明るい」, uhjisa 「大きい」, ikusa 「小さい」, nagasa 「長い」, mizjikasa 「短い」, fukasa 「深い」, asasa 「浅い」, takasa 「高い」, hjaasa 「低い」, tuusa 「遠い」, ufusa 「重い」, harusa 「軽い」, arasa 「粗い」, birasa 「柔らかい」, furusa 「古い」, miisa 「新しい」, wakasa 「若い」, cjuusa 「強い」, jasa 「安い」, ufusa 「大きい」, icjasa 「少ない」, warosa 「悪い」, heesa 「早い・速い」, nisa 「遅い」, utunasa 「大人しい」, kusasa 「臭い」, cjurasa 「きれい」, kurusa 「黒い」, sjuusa 「白い」, aasa 「赤い」, oosa 「青い」
$-sja$ hazjikasja 「恥ずかしい」, isugasja 「忙しい」, nacjikasja 「懐かしい」, hoorasja 「楽しい・嬉しい」, waasja 「おかしい」, mizjirasja 「面白い・珍しい」, hamarasja 「うるさい」, atarasja 「勿体ない」, agumasja 「だるい」, oosja 「危ない」, muzjikasja 「難しい」

形容詞の多くは、 $-sa$  または $-sja$  の形容詞接辞を接続するが、*a-ca* 「暑い」 *jukwa-* 「良い」 は例外的に $-sa$ ,  $-sja$  を取らず、*acaN* 「暑い」 *jukwaN* 「良い」 等と言う。

#### 5.4.2 派生・重複

形容詞に接続する派生接辞として、副詞化接辞 $-ku$ ,  $-taama$  がある。また、語根が 2 モーラの *sa* 形容詞は重複する。

<sup>9</sup> 歴史的には、沖縄方言の $-sa$  形式が日本古語のク活用に、 $-sja$  形式はシク活用に対応することが指摘されており（名嘉真 1992），国頭方言も同様の対応を持つと考えられる。

国頭方言は、屈折のない単独形式 (*cjura-sa* 「きれい」) で動詞を修飾することが出来るが、接辞-*ku* を接続し (*cjura-ku* 「きれいに」) 動詞を修飾することも出来る。複数の統語機能を持つ単独形式に比べ、-*ku* を接続した形式は副詞的な機能しか持たない。接辞-*ku* が *sa* 形容詞に接続する時は、語根に接続するが(50)、*sja* 形容詞に接続する時は、語幹に接続する(51)。



接辞-*taama* は *sa* 形容詞の語幹に接続し「小さい」「少ない」等の“程度が低い”形容詞の意味を強める。(52) は *a-sa*「浅い」に-*taama* が接続し、*asa-taama*「とても浅い」と意味を強めている。

- (52) *asa-taama=nu nii=niti ubukurit-a-N*  
 浅い-EMPH=GEN 場所=LOC2 溺れる-PST-IND  
 とても浅い場所で溺れた。

sa形容詞は、語根の重複によって「大きい」「多い」等の意味が強められる。重複が起きる時には(53)の現象が観察される。

(53) 形容詞の重複に関するルール

- a. 重複された形態素の末母音は長音化する。 例) *naga-sa*「長い」>*naga-nagaa=tu*「とても長く」
  - b. 重複された形態素は連濁現象を起こす。 例) *kuru-sa*「黒い」>*kuru-guruu=tu*「とても黒く」
  - c. 重複の後に必ず引用の助詞の=*tu*「～と」を伴う

- (54) *hada=wa kuru-guruu=tu hjikat-i=gadi u-N*  
 肌=TOP 黒い-RED=QTQUOT 光る-SEQ=ADD2 いる-IND  
 肌は黒々と光ってさえいる。

### 5.4.3 複合

形容詞の中には、動詞の連用形と複合する補助形容詞として、*gisa* 「～そうだ」，*guru-* 「～しにくい」，*busja* 「～したい」，*jasa* 「～しやすい」がある。

(55)は動詞 *sjin-*「死ぬ」の連用形と、補助形容詞 *gi-*「～そうだ」が複合し、*sjinigisaN*「死にそうだ」という複合形容詞を形成している。

- (55) *unu kuru=wa kiNgjo=wa sjin-i+gi-sa at-a-N*  
 その 頃=TOP 金魚=TOP 死ぬ-INF+そうだ-ADJ ある-PST-IND  
 その頃は、金魚は死にそうちつた。

## 5.5 その他品詞

そのほかの品詞として連体詞、感動詞、助詞、副詞がある。

### 5.5.1 連体詞

連体詞は名詞の修飾部のみにたち、いかなる屈折変化もしない。連体詞に分類されるのは、*funu* 「この」，*unu* 「その」，*anu* 「あの」，*icjanu* 「どんな」の4語である。

### 5.5.2 感動詞

感動詞は単独で発話を形成し、いかなる修飾関係を持たず、屈折変化もしない。*abee* 「あら！」など感情や驚きを表す語、*anuu* 「あのー」などの言い淀み（フィラー），*iN* 「はい」などの応答、*?jaa* 「ねえ」などの呼びかけ語がある。

### 5.5.3 助詞

助詞は単独で発話を形成せず、修飾関係を持たず、屈折変化をしない。助詞は常にホストとなる名詞句や述部に後節する。助詞はその機能により、以下の4つに分類することが出来る。

- 格助詞：名詞句に接続し、名詞句と文の主要部との統語的関係や、名詞句と他の語との意味的関係を示す。
- 接続助詞：従属節末に接続し、主節に対する従属節の役割を示す。
- 副助詞：名詞、副詞、節などの様々な要素に接続し、接続先に特別な意味を加える。
- 終助詞：文末に接続し、文のモダリティ（文に対する話し手の認識や、聞き手に対する話し手の態度）を示す。

#### 5.5.3.1. 格助詞

格助詞については、6.1.3で述べる。

#### 5.5.3.2. 接続助詞

接続助詞は従属節末に接続し、主節に対する従属節の役割を決定する。接続助詞の一覧は表26の通りである。

表26 接続助詞

形式	訳	グロス	従属節の種類（意味）
=tu	「～と」「～から」	CSL	副詞節（条件・理由）
=tuni	「～から」	CSL	副詞節（理由）
=di	「～と」	QUOT	引用節

=dicji	「～と（言って）」	QUOT	引用節
=cji	「～と」	QUOT	引用節
=gacjana	「～ながら」		副詞節（時）
=gena	「～後」		副詞節（時）

### 5.5.3.3. 副助詞

副助詞は、名詞句、副詞、形容詞など様々な文の要素に接続し、接続先に様々な意味を加える。副助詞の一覧は表 27 の通りである。

表 27 副助詞

形式	訳	グロス	標示内容
=wa	「～は」	TOP	文の主題、対比
=mu	「～も」	ADD	付加
=gadi	「～さえ・まで」	ADD2	意外・添加
=du	「～こそ（ぞ）」	FOC	焦点
=ga	「～こそ（ぞ）」	FOC2	焦点
=daki	「～だけ」	LIM	限定
=bee	「～くらい」「～ばかり」	APPR	a. 近似値、b. 頻度の多いもの
=naga	「～なんか」	EXM	曖昧
=tuka	「～とか」	EXM	例示・列举
=fudu	「～ほど」		基準
=kamu	「～かも」	EPI	可能性
=gara	「～か」	①EXM, ②EPI	①例示、②可能性

### 5.5.3.4. 終助詞

終助詞は文末に接続し、モダリティ（文に対する話し手の認識や、聞き手に対する話し手の態度）を表す。終助詞の一覧は次頁の

表 28 の通りである。

=kamu 「～かも」は、文中で副助詞のように機能することもあるが(56)、文末で終助詞のように機能することもある(57)。

- (56) *naacjaa=wa ami=nu fu-ju-N=kamu waka-ra-N*  
 明日=TOP 雨=NOM 降る-NPST-IND=EPI 分かる-NEG-IND  
 明日は雨が降るかもしれない。

- (57) *naacjaa=wa ami=nu fu-ju-N=kamu*

明日=TOP 雨=NOM 降る-NPST-IND=EPI

明日は雨が降るかも。

表 28 終助詞

形式	訳	グロス	モダリティ（意味）
=naa	「～か？」	YNQ	疑問（肯否疑問）
=joo	「～か？」	WHQ	疑問（内容疑問）
=kaja	「～かな？」	Q	疑問（自問）
=moo	「～だよ」	EXM	説明
=gi	「～よ」	EXM	説明
=jaa	「～ね」	SFP	伝達態度（確認）
=doo	「～よ」	SFP	伝達態度（伝達）
=djaa	「～よ」	SFP	伝達態度（伝達）
=diro	「～です」	POL	伝達態度（丁寧）
=sja	「～さ」等	EMPH	伝達態度（自明性）
=gaa	「～んだよ」等	EMPH	伝達態度（自明性）
=kamu	「～かも」	EPI	可能性
=daru	「～だろう」	EPI	推量

#### 5.5.4 副詞

副詞は動詞や形容詞を修飾し、屈折変化しない。(58) は *maNdi* 「たくさん」が動詞 *uti* 「いて」を修飾している。

(58)	<i>zjikoku=nu</i>	<i>cjuu=wa</i>	<i>sjigarit-u-nu</i>	<i>cju-Ncja</i>	<i>maNdi</i>	<i>ut-i</i>
	地獄=GEN2	人=TOP	痩せる-CONT-ADN	人-PL	たくさん	いる-SEQ
地獄の人は、痩せている人がたくさんいて…						

副詞は共通の形態特徴を持たないが、一部の副詞は重複形を持つ。擬音語・擬態語は *bira~bira* 「柔らかい」、*wazji~wazji* 「いらいら」等のように、1モーラまたは2モーラの語基を重複する形をとる。

## 6. 統語論

### 6.1 名詞句構造

#### 6.1.1 名詞句の構造

名詞句は修飾部と主要部（名詞）から構成される。修飾部は、連体詞、形容詞、拡大名詞句、連体節が埋める。格助詞まで含めた名詞句を「拡大名詞句」と呼ぶ。

#### (59) 名詞句の構造

(+修飾部) 名詞 (+格助詞)

(60) は修飾部を連体詞が埋めている。(61) は修飾部を形容詞の連体形が埋めている。(62) は名詞+格助詞の拡大名詞句が修飾部を埋めている。(63) は述語動詞が連体形を取る連体節が、修飾部を埋めている。

(60) <i>anu</i>	<i>cjuu</i>	(61) <i>cjura-sa-nu</i>	<i>cjuu</i>	(62) <i>taroo=ga</i>	<i>jaa</i>
あの	人	きれい-ADJ-ADN	人	太郎=GEN	家
あの人		きれいな人		太郎の	家
(63)    [ <i>Maa=ni</i>	<i>u-nu</i> ] <sub>NP</sub>	<i>Maa</i>			
そこ=LOC1	いる-ADN	馬			
そこにいる	馬				

#### 6.1.2 名詞句階層

名詞が格助詞を選択する時や、5.2で扱った複数接辞を取る時に、名詞の意味が形式の選択に関与することがある。

名詞と選択する形式との関係は、有生性の階層 (animacy hierarchy: Silverstein 1976, Dixon 1979) を用いることで説明できる。有生性の階層は、Silverstein が動作主へのなり易さを元に名詞句を分類したものであり、通言語的に名詞が関わる様々な文法現象を説明することが知られている。

#### (64) 有生性の階層 (Dixon 1979:85 )

1 人称代名詞 > 2 人称 > 3 人称 > 固有名詞 > 人間名詞 > 動物名詞 > 無生物名詞

国頭方言の場合、複数接尾辞の選択や、格助詞の選択を説明するためには、「2 人称」を非尊称と尊称の別に基づいて、さらに 2 つに分ける必要がある。また「人間名詞」も「呼称として使えるか」の別に基づいて、さらに 2 つに分ける。例えば、目上の親族名詞 (ex. *zjaazjaa* 「おじいさん」) は呼称として使えるが、目下の親族名詞 (ex. *utu* 「弟」) は呼称として使えない。改めて、国頭方言の名詞句階層は(65)のように仮定出来る。

#### (65) 国頭方言における名詞句階層

1 人称 > 2 人称非尊 > 2 人称尊 > 3 人称 > 固有 > 呼称 > 人間 > 動物 > 無生物

### 6.1.3 格助詞

名詞の格は、主に格助詞によって標示される。表 29 は、格助詞の一覧である。

表 29 格助詞

格	グロス	形式	主な統語機能、意味
主格	NOM	=ga/=nu	主語の標示
対格 <sup>10</sup>		ø	目的語の標示
属格	GEN	=ga/=nu	名詞を修飾する名詞の標示
与格	DAT	=ni	間接目的語の標示
具格	INS	=sji	(a) 手段・道具, (b) 材料, (c) 原因・理由, (d) 数量・部分量, (e) 動作の主体, (f) 事態の成立領域, (g) 時間, (h) 動作主の状態
共格	COM	=tu	(a) 行為を共に行う相手, (b) 比較の基準, (c) 名詞の接続
比較格	CMP	=jooka	比較の基準
場所格 1	LOC1	=ni	(a) 状態の場所, (b) 事態が生じる時
場所格 2	LOC2	=niti	動作の場所
向格	ALL	=cji	(a) 移動の方向, (b) 行為の方向
奪格	ABL	=kara	(a) 動作の起点, (b) 範囲や期間の起点, (c) 物や情報の発信元, (d) 移動の経路
終局格	TERM	=Ntani/=Ntabe/=madi	時間や場所の終点

#### (a) 主格

主格の格助詞は=ga または=nu である。(65) 名詞句階層において「呼称」より階層の上位にある名詞は=ga を取り、「人間」より下位の階層に位置する名詞は=nu を取る。例えば(66)は主語が一人称なので=ga を取るが、(67)は主語が呼称として使えない人間名詞なので=nu を取る。

- |                                |                            |
|--------------------------------|----------------------------|
| (66) <i>wa=ga       s-ju-N</i> | (67) <i>cjuu=nu    u-N</i> |
| 1SG=NOM    する-NPST-IND         | 人=NOM    いる-IND            |
| 私がする。                          | 人がいる。                      |

#### (b) 対格

<sup>10</sup> 対格は形態的標示がないので、例文の中ではグロスを振らない。

対格は形態的に標示されない。(68) は *waN* 「私」が文の目的語だが、形態的な標示はない。これは主語と目的語がいかなる組み合わせにおいても、同じである。

- (68) *sabu=ga waN abit-a-N*  
 サブ=NOM 1SG 呼ぶ-PST-IND  
 サブが私を呼んだ。

#### (c) 属格

属格は、名詞によって形態的に標示されない場合と、格助詞=*ga* または=*nu* を選択する場合がある。(65) 名詞句階層において「2人称非尊称」よりも上に位置する名詞はそのままで後接名詞を修飾する。「呼称」より階層の上位にある名詞は=*ga* を取り、「人間」より下の階層にある名詞は=*nu* を取る。(69)は1人称代名詞 *waN* 「私」が、格助詞を取らずに名詞を修飾している。(70)は *sabu* (人名) が呼称であるため、格助詞=*ga* を取っている。(71)は *cjuu* 「人」が「人間名詞」に分類される名詞(呼称としては使えない)ため、格助詞=*nu* を取っている。

- (69) *waN jaa*      (70) *sabu=ga jaa*      (71) *cjuu=nu jaa*  
 1SG 家                  サブ=GEN 家                  人=GEN 家  
 私の家                  サブ(人名)の家                  人の家

#### (d) 与格

与格の格助詞は=*ni* である。(72)は間接目的語 *waN* 「私」が与格の格助詞=*ni* を接続している。

- (72) *sabu=ga waN=ni sabacji kurit-a-N*  
 サブ=NOM 1SG=DAT 櫛 あげる-PST-IND  
 サブが私に櫛をくれた。

#### (e) 具格

具格の格助詞は=*sji* である。具格は主に、手段や道具、材料、原因・理由などを表す。(73)は沖縄まで行く手段としての *hjini* 「船」が具格=*sji* を取っている。

- (73) *okinafa=cji hjini=sji izj-a-N*  
 沖縄=ALL 船=INS 行く -PST-IND  
 沖縄へ船で行った。

(f) 共格

共格の格助詞は=*tu* である。共格は、行為を一緒に行う人や比較の基準を表す。(74)は主語の *wana* 「私（は）」が、一緒に歌いたい人である *azji* 「おばあさん」が共格=*tu* を取っている。

- (74) *wana azji=tu uta-i+bu-sja-N*  
1SG おばあさん=COM 歌う-INF+欲しい-ADJ-IND  
私はおばあさんと歌いたい。

(g) 比較格

比較格の格助詞は=*jooka* である。比較格は、比較の基準を表す。(75)は、主語の *kiNnjuu* 「昨日」の比較の対象である *hjuu* 「今日」が比較格=*jooka* を取っている。

- (75) *kiNnjuu=wa hjuu=jooka hazji=nu cjuu-sa at-a-N*  
昨日=TOP 今日=CMP 風=NOM 強い-ADJ ある-PST-IND  
昨日は今日より風が強かった。

(h) 場所格(1)

場所を表す格助詞は2つある。「状態の場所」や「時間」を表す格助詞は=*ni* である。(76)は「花子がいる」という状態が生じている場所 *jaa* 「家」が格助詞=*ni* を取っている。

- (76) *hanako=wa jaa=ni u-N*  
花子=TOP 家=LOC1 いる-IND  
花子は家にいる。

(i) 場所格(2)

状態が生じる場所に対して「動作が生じる場所」を表す格助詞は=*niti* である。(77)は「花子が遊ぶ」という動作が生じている場所 *umi* 「海」が格助詞=*niti* を取っている。

- (77) *hanako=wa umi=niti asjid-a-N*  
花子=TOP 海=LOC2 遊ぶ-PST-IND  
花子は海で遊んだ。

(j) 向格

向格の格助詞は=*cji* である。向格は移動や行為の方向を表す。(78)は「おじいちゃんが行く」行先の *fattee* 「畑」が格助詞=*cji* を取っている。

- (78) *zjaazja=wa fattee=cji izj-a-N*  
 祖父=TOP 畑=ALL 行く -PST-IND  
 おじいちゃんは畠へ行った。

## (k) 奪格

奪格の格助詞は=*kara* である。奪格は、主に動作の起点、範囲や期間の起点を表す。共通語の「から」と異なり「移動の経路」を表せることも注目される。

(79)は「父が帰る」起点の *kagosjima* 「鹿児島」が格助詞=*kara* を取っている。(80)は「歩く」という移動の経路 *micji* 「道」が格助詞=*kara* を取っている。

- (79) *acja=wa kiNnjuu kagosjima=kara mudut-a-N*  
 父=TOP 昨日 鹿児島=ABL 帰る -PST-IND  
 父は昨日鹿児島から帰った。
- (80) *micji=nu maNnaka=kara ak-una=joo*  
 道=GEN 真ん中=ABL 歩く -PROH=SFP  
 道の真ん中を歩くなよ。

## (l) 終局格

終局格の格助詞は=*Ntani*/*Ntabe*/*madi* など、幾つかの形式がある。いずれも機能の差は明らかでないためグロスは分けない。終局格は動作や範囲の終点を表す。(81)は「担ぐ」という動作の終点 *jaa* 「家」が格助詞=*Ntabe* を取っている。

- (81) *fuN nii ja=Ntabe hatamik-i=joo*  
 これ 荷 家=TERM 担ぐ-IMP=SFP  
 この荷物、家まで担いでね。

**6.2 述部構造**

述部は名詞述部、動詞述部、形容詞述部がある。

**6.2.1 名詞述部**

名詞述部の構成は(82)のように表せる。名詞句自体は屈折出来ないため、コピュラ動詞が屈折を担う。名詞に後接できるコピュラ動詞は、*ai* 「～ではない」、*a-* 「～だ」、*ja-* 「～だ」である。横山 (2017) では、名詞とコピュラから成る述部について、主語との呼応をコピュラが担うため、コピュラを主要部とする「コピュラ述部」と考えていた。しかし、名詞とコピュラのうち、省略可能なのはコピュラであるため、本稿では名詞が主要部の「名詞述部」に解釈を改めている。

- (82) 名詞 (+コピュラ動詞) (+終助詞)

否定文の述部は、名詞と否定のコピュラ動詞 *ai* 「～ではない」、または名詞とコピュラ動詞 *a-* の否定形が形成する(83)。(84)はコピュラ動詞 *a-* 「～だ」が屈折して過去の事態を表している。

- (83) *wana seNsee* {*ai / a-ra-N*}  
1SG.TOP 先生 {COP.NEG / COP-NEG-IND}  
私は先生じゃない。  
(84) *wana seNsee* {*at-a-N / jat-a-N*}  
1SG.TOP 先生 COP-PST-IND  
私は先生だった。

## 6.2.2 動詞述部

文法関係を表す名詞を「項」と呼ぶとき、述語の動詞によって、文中に現れる項の数が変わる。一項を導く動詞には、存在動詞や、*a-k* 「歩く」 *ik-* 「行く」などの自動詞がある。二項を導く動詞には、*a-ma* 「怒る」 *mi-* 「見る」 *kam-* 「食べる」などの他動詞がある。三項を導く動詞には、*kuri-* 「くれる／あげる」 *muro-* 「もらう」の授受動詞がある。

(85)は述語が存在動詞 *a-* 「ある」であり、主語項のみが現れる。(86)は述語が他動詞 *a-ma* 「怒る」であり、主語・目的語の2項が現れる。(87)は述語が授受動詞 *kuri-* 「くれる」であり、主語・目的語・間接目的語の3項が現れる。

- (85) *hookusu=nu maNdi a-N*  
ほくろ=NOM たくさん ある-IND  
ほくろがたくさんある。  
(86) *ama=g a waN amat-a-N*  
母=NOM 1SG 怒る-PST-IND  
母が私を怒った。  
(87) *zjaazja=ga sabacji waN=ni kurit-a-N*  
祖父=NOM 櫛 1SG=DAT くれる-PST-IND  
お爺さんが櫛を、私にくれた。

動詞が2つ連続して述語句を形成する場合、前の動詞が継起形をとる。(88)は *ee-* 「開ける」が継起形をとり、*eeti uN* 「開けている」という述語句を形成している。この述語句で、項の数を決めている主要部は前の名詞である。(89)は *kicj-* 「来る」が継起形をとり、*kicji murotaN* 「来てもらった」という述語句を形成している。この場合、項の数を決めている主要部は後ろの名詞である。

- (88) *icjimu madu eet-i u-N*  
いつも 窓 開ける-SEQ いる-IND

いつも窓を開けている

- (89) *wa=ga sabu=ni kicj-i murot-a-N=doo*  
 1SG=NOM サブ=DAT 来る-SEQ もらう-PST-IND=SFP  
 私がサブに来てもらったよ。

### 6.2.3 形容詞述部

形容詞述部は(90)のように表せる。形容詞と共に述部を作る存在動詞には *a-* 「～ある」 *na-* 「～ない」がある。終助詞は任意で後続する。なお、横山（2017）では、形容詞と存在動詞から成る述部について、主語との呼応を存在動詞が担うため、存在動詞を主要部と考えていた。しかし、形容詞と存在動詞のうち、省略可能なのは存在動詞であるため、本稿では形容詞が主要部の「形容詞述部」に解釈を改めている。

- (90) 形容詞句 (+存在動詞) (+終助詞)

(91)は形容詞と存在動詞 *a-*が述部を形成している。この述語句は、*nagasa* あるいは *nagasaN* 「長い」という一語の形式で表すことも出来る。(92)は形容詞のあとに存在動詞 *na-* 「ない」が後続することで、否定文を作っている。

- (91) *ura harazji=wa naga-sa a-N*  
 2SG 髪の毛=TOP 長い-ADJ COP-IND  
 あんたの髪の毛は長い。
- (92) *ura harazji=wa naga-sa n-a-N*  
 2SG 髪の毛=TOP 長い-ADJ COP-NEG-IND  
 あんたの髪の毛は長くない。

## 6.3 構文構造

### 6.3.1 文の構造

文は単文、重文、複文に分類できる。節が1つだけあるものを単文、節が2つ以上あり、等位に接続しているものを重文、主従関係があるものを複文と呼ぶ。

(93)は主語と名詞述語が1対の単文である。(94)は2つの節が並列された重文である。重文を形成するとき、前節の述語は継起形か並列形である。(95)は2つの節に主従関係がある複文で、前節が後節を修飾している。複文については、6.4で取り上げる。

- (93) *waN naa=wa akiko=diro*  
 1SG 名=TOP あきこ=POL  
 私の名前はあきこです。

- (94) *wana*      *utoot-i*      *akemi=wa*      *wudut-a-N*  
  1SG.TOP    歌う-SEQ    あけみ=TOP    踊る-PST-IND  
  私は歌ってあけみは踊った。
- (95) *wa=ga*      *hajot-a-nu*      *gakko=wa*      *naa=ni*      *nat-a-N*  
  1SG=NOM    通う-PST-ADN    学校=TOP    ない=LOC1    なる-PST-IND  
  私が通った学校は無くなった。

### 6.3.2 アライメント

自動詞文の唯一項を S, 他動詞文の動作主を A, 他動詞文の被動作主を P としたとき, 国頭方言は S と A の標示が同じで, P の標示が異なる, 主格対格型言語である。また, S/A が有標であるのに対し, P が無標である「有標主格型 (Marked Nominative)」である。言語類型的に有標主格型は非常に少数だと言われており, WALS の 98 図<sup>11</sup>には 6 言語しか報告がない。自然談話資料を観察すると, 日本諸方言の中には, 有標主格寄りの方言が少なからずあるが (Kibe et al. 2021), 対格標示の格助詞が全く存在しない点で国頭方言は特徴的である。例文から, *sabu* 「サブ (人名)」が自動詞文の唯一項を埋めるとき(96), 他動詞文の動作主になるとき(97)はいずれも助詞=*ga* を取る一方で, 他動詞文の被動作主になるときは何も助詞を取らない(98)ことが確認できる。

- (96) *jaa=ni*      *sabu=ga*      *u-N*  
  家=LOC1    サブ=NOM    いる-IND  
  家にサブがいる。
- (97) *sabu=ga*      *hanako*      *abit-a-N*  
  サブ=NOM    花子      呼ぶ-PST-IND  
  サブが花子を呼んだ。
- (98) *hanako=ga*      *sabu*      *abit-a-N*  
  花子=NOM    サブ      呼ぶ-PST-IND  
  花子がサブを呼んだ。

### 6.3.3 結合価操作

項の数やアライメントを変更する操作は「結合価操作 (valence changing operation)」と呼ばれる。結合価操作には, 結合価 (項) の数を増やす「結合価増加操作」と, 結合価の数を減らす「結合価減少操作」がある。関連事項として, *jaburijuN* 「壊れる」と *jabujuN* 「壊す」のように, 語彙的意味を共有しながらも, 結合価が異なる動詞の対 (有対動詞) があるが, ここでは省く。

---

<sup>11</sup> Feature 98A: Alignment of Case Marking of Full Noun Phrases

### 6.3.4 結合価増加操作

結合価を増加させる操作として「使役化」がある。一項動詞は使役接辞-*ras*-を接続すると2つの項を取る動詞に派生する。能動文において、動作主を表す項は主格を取るが、使役文において、動作主を表す項は対格を取る。使役文で主格を取る項は、出来事を引き起こす使役主を表す。

*ik*-「行く」は一項動詞だが、使役接辞-*ras*-を取ることで3つの項を取る動詞に派生する。(99)において、動作主の *zjaazja* 「祖父」は主格を取るが、(100)において、動作主の *zjaazja* 「祖父」は対格を取っている。また、使役文で増えた項 *azji* 「祖母」は主格を取り、使役主を表している。

- (99) *zjaazja=ga kiNnjuu wadomari=cji izj-a-N*  
 祖父=NOM 昨日 和泊=ALL 行く-PST-IND  
 祖父が昨日和泊へ行った。

- (100) *azji=ga zjaazja wadomari=cji ik-acj-a-N*  
 祖母=NOM 祖父 和泊=ALL 行く-CAUS-PST-IND  
 祖母が祖父を和泊へ行かせた。

二項動詞は使役接辞-*ras*-を取ることで、3つの項を取るようになる。使役文は、能動文に比べて項が1つ多く、その項は出来事を引き起こす使役主を表す。能動文において動作主は主格を取るが、使役文において動作主は与格を取る。*kam*-「食べる」は二項動詞だが、使役接辞-*ras*-を取ることで、3つの項を取る動詞に派生する。(101)は能動文で、動作主 *Maa* 「馬」が主格、被動主 *kusa* 「草」が対格を取っている。一方、(102)は使役文で、使役主 *wa* 「私」が主格、動作主 *Maa* 「馬」が与格、被動主 *kusa* 「草」が対格を取っている。

- (101) *Maa=ga kusa kad-a-N*  
 馬=NOM 草 食べる-PST-IND  
 馬が草を食べた。

- (102) *wa=ga Maa=ni kusa kam-acj-a-N*  
 1SG=NOM 馬=DAT 草 食べる-CAUS-PST-IND  
 私が馬に草を食べさせた。

### 6.3.5 結合価減少操作

結合価を減少させる操作として「受動化」がある。二項動詞は受動接辞-*ra*-を接続することで、主語と目的語を取る動詞から、主語と間接目的語を取る動詞に派生する。項数が減らないため、典型的な「結合価減少」ではないが、より中心的な統語機能を果たす主語と目的語から、主語と間接目的語に変化するため、広い意味での「結合価減少操作」と捉える。二項動詞は受動接辞-*ra*-を接続することで、動作主を表す項が与格に、被動主を表す項が主格になる。

対格から与格 *a-ma* 「怒る」は、主格と対格を取る動詞であるが、受動接辞-*ra*-を接続することで、主格と与格を取る動詞に派生する。(103)は能動文であり、動作主 *seNsee* 「先生」が主格、被動主 *sabu* 「サブ」が対格を取っている。一方、(104)は受動文であり、動作主 *seNsee* 「先生」が与格、被動主 *sabu* 「サブ」が主格を取っている。

- (103) *seNsee=ga sabu amat-a-N.*  
先生=NOM サブ 怒る-PST-IND  
先生がサブを怒った。
- (104) *sabu=ga (seNsee=ni) ama-rat-a-N.*  
サブ=NOM 先生=DAT 怒る-PASS-PST-IND  
サブが先生に怒られた。

## 6.4 複文構造

複文は、単独で発話が成立する主節と、他の節と共にして文が成立する従属節がある。従属節は更に、連体節、副詞節、補文節に分類できる。従属節は主節に先行する。

### 6.4.1 連体節

連体節の述語は連体形-*nu* をとり、名詞を修飾する。(105)は前節 *wa=ga ati anu* 「私が知っている」が後節の主語 *cjuu* 「人」を修飾する連体節である。

- (105) *wa=ga ati a-nu cjuu=wa u-radanaat-a-N.*  
1SG=NOM 知る-SEQ ある-ADN 人=TOP いる-NEG-PST-IND  
私が知っている人はいなかった。

### 6.4.2 副詞節

副詞節は動詞や主節全体を修飾する。副詞節は主節の「条件」「理由」「時」を表す。(106)は前節 *wutu=nu sjigutu ik-iba* 「夫が仕事へ行ったら」が、後節の条件を表す副詞節である。(107)は前節 *wa=ga izjanu tuki* 「私が行った時」が、後節の時を表す副詞節である。

- (106) *wutu=nu sjigutu ik-iba wana nibu-ju-N.*  
夫=NOM 仕事 行く-COND 1SG.TOP 眠る-NPST-IND  
夫が仕事に行ったら、私は眠る。
- (107) *wa=ga izj-a-nu tuki takako=wa nibut-ut-a-N.*  
1SG=NOM 行く-PST-ADN 時 たかこ=TOP 眠る-CONT-PST-IND  
私が行った時、たかこは眠っていた。

### 6.4.3 補文節

補文節は、主節の項や、補語になる。補文節には、(a) 名詞化され、主節の主語や目的語になる節、(b) 引用の内容を表す節、(c) 疑問の内容を表す節、がある。

(108)は、前節の述語動詞 *mi-*「見る」が補文接辞-*sji*を取り、名詞化されて主節 *aN kwaawa kizu-kadanaataaN*「あの子は気が付かなかった」の主語になっている。(109)は前節 *sorobaN=wa masurusja sjiraramu*「そろばんはまどろっこしくて出来ない」に引用助詞=*di*が付き、引用の内容を表している。(110)は、*nuudi ?ju-N*「何と言う」が疑問助詞=*ka*を伴い、動詞述語 *waka-*「分かる」の補語になっている。

- (108) [wa=g a micj-ut-a-sji] aN kwaa=wa <kizuk>-adanat-a-N.  
 1SG=NOM 見る-CONT-PST-COMP あの 子=TOP 気付く-NEG-PST-IND  
 私が見ていたのを、あの子は気付かなかった。
- (109) [sorobaN=wa masuru-sja sji-ra-ra-mu]=di icj-i=joo.  
 そろばん=TOP まどろっこしい-ADJ する-POT-NEG-EPI=QUOT 言う-SEQ=SFP  
 「そろばんはまどろっこしくて出来ない」と言って
- (110) “mottaina”=di=wa [nuu=di ?ju-N]=ka waka-ra-N=tu=jaa.  
 勿体ない=QUOT=TOP 何=QUOT 言う-NPST=Q 分かる-NEG-IND=CSL=SFP  
 「勿体ない」とは、(方言で) なんと言うか分からぬからね。

## 7. 機能面からの記述

### 7.1 情報構造

文の情報構造について、主題 (topic) と焦点 (focus) を紹介する。

#### 7.1.1 主題

主題とは、文が「何について述べているか」と言う、その叙述の対象を指す。Lambrecht (1994: 131) によると、ある指示対象が、ある命題の「主題」と解釈されるのは、ある状況下で、その命題がその指示対象に関すると解釈できる場合、すなわち聞き手の持つその指示対象の知識に関連し、かつその知識を増やす情報を表すと解釈される場合である。国頭方言においては、主題は主題助詞=*wa*によって標示される。

(111)では A が B の *mjaa*「猫」の近況を尋ねたのに対し、B がその猫に関する説明をしている。B の発話は *waN mjaa*「私の猫」という、A と B の間で既に共有された指示対象に関して、A の知識を増やすものである。したがって、B の発話は *waN mjaa*「私の猫」が主題となる文である。この時、主題 *waN mjaa*「私の猫」は主題助詞=*wa*を接続している。

- (111) A) ura mjaa icja sji-i=joo?  
 2SG 猫 どう する-SEQ=WHQ

あんたの猫、どうしたの？

- B) *waN mja=wa sjizj-a-N=doo.*  
1SG 猫=TOP 死ぬ-PST-IND=SFP  
私の猫は死んだよ。

### 7.1.2 焦点

話し手が伝える、聞き手の前提にない新情報を「焦点」と呼ぶ（Lambrecht 1994: 212）。ここでいう「新情報」とは、「話し手が発話によって、聞き手に新たな知識を加えようと思っている情報」を指す（Lambrecht 1994: 50）。国頭方言において、焦点は主に焦点助詞=*ga*, *=du* によって表される。*=ga* は疑問詞疑問文に、*=du* はそれ以外の文に出現する。名詞句に現れる時には、格助詞の後に接続する。

(112)は、文の新情報である疑問詞 *nuu* 「何」に焦点助詞=*ga* が接続している。

- (112) *uN=ni=wa aNtaa=wa ai nuu=di=ga Jut-a-ru?*  
それ=LOC=TOP アンター=TOP ではない 何=QUOT=FOC2 言う-PST2-MSB  
それには（方言で）「アンター」ではない（とは言わない）。何と言っていた？

(113) は「誰が泣いているか？」という質問に対し、*utu* 「弟」という新情報を回答している。このとき新情報 *utu* 「弟」と格助詞=*nu* に後続する形で、焦点助詞=*du* が接続している。

- (113) A) *taN=ga nacj-u-i=joo?*  
誰=NOM 泣く-CONT-WHQ=WHQ  
誰が泣いている？
- B) *[utu]=nu=du nacj-u-N=djaa.*  
弟=NOM=FOC 泣く-CONT-IND=SFP  
弟が泣いているよ。

琉球諸語においては、焦点助詞と呼応して述語動詞の活用が変わる「焦点呼応」、いわゆる「係り結び」が知られている。例えば(114)は、述語動詞が直説法-Nではなく-*ru*（結び形）を取っている。但し、自然談話中での係り助詞（=*ga*, *=du*）と結び形-*ru* が共起する確率は1割ほどで必ずしも呼応関係にあるとは言えない（横山 2020）。

- (114) *cjikara=nu a-nu Maa-Ncja=du cjina=cji ic-ju-ru*  
力=NOM ある-ADN 馬-PL=FOC 知名=ALL 行く-NPST-MSB  
(知名は遠いので) 力がある馬たちだけ知名へ行く。

## 7.2 テンス・アスペクト・エビデンシャリティー

### 7.2.1 テンス

国頭方言のテンスは、非過去と過去に大別される。非過去時制と過去時制の境界や、時制の標示方法は、動作動詞と非動作動詞によって異なる。

非動作動詞において、過去時制は発話時点より前の時間を、非過去時制は発話時点を含む現在より後の時間を表す。非動作動詞の非過去時制は標示されず、過去時制は-a-（過去1接辞）で標示される。

動作動詞において、過去時制は現在より前の時間を表し、非過去時制は発話時点より後の時間を表す。非動作動詞の場合と異なり、現在進行中の動作は「アスペクト」（非完結相）で表される。動作動詞の非過去時制は非過去接辞-ju-、過去時制は-a-（過去1接辞）で標示される。また、アスペクトやエビデンシャリティー的な意味も含む接辞として-juta-（過去2接辞）がある（表30）。

表30 時制と動詞の屈折形式

	非過去	過去
動作動詞	-ju- (ex. ac-ju-N 「歩く」)	-a- (ex. acj-a-N 「歩いた」) -juta- (ex. ac-juta-N 「歩いていた」)
非動作動詞	標示なし (ex. uN 「いる」)	-a- (ex. ut-a-N 「いた」)

(115)は *nama* 「今」という現在の状態について述べた文である。このとき、述語の存在動詞 *uN* 「いる」には形式的な時制の標示がない。(116)は同じく現在の状態について述べた文だが、述語の動作動詞 *fu-* 「降る」は、アスペクトを表す継続接辞-*u-*を接続している。動作動詞が、非過去時制を取るのは、(117)のように未来を表す文の場合である。

- (115) *zjaazja=wa nama jaa=ni u-N=doo*  
 祖父=TOP 今 家=LOC1 いる-IND=SFP  
 お爺ちゃんは今家にいるよ。
- (116) *nama ami=nu fut-u-N*  
 今 雨=NOM 降る-CONT-IND  
 今雨が降っている。
- (117) *naacja ami=nu fu-ju-N=doo*  
 明日 雨=NOM 降る-NPST-IND=SFP  
 明日雨が降るよ。

過去時制は、非動作動詞も動作動詞も過去1接辞-a-を使って表す(118)(119)。同じ過去時制を表す接辞でも、過去2接辞-*juta-*は「よく～した」のように、「過去の繰り返しの出来事」や「過去

の習慣」というアスペクト的意味を併せ持つほか(120), 7.2.3で紹介するように, エビデンシャリティーの意味を持つこともある。

- (118) *zjaazja=wa kiNnjuu jaa=ni ut-a-N=doo*  
 祖父=TOP 昨日 家=LOC1 いる-PST-IND=SFP  
 お爺ちゃんは昨日家にいた。
- (119) *kiNnjuu ami=nu fut-a-N=doo*  
 昨日 雨=NOM 降る-PST-IND=SFP  
 昨日雨が降ったよ
- (120) *fuzu=wa ami=nu juu fu-juta-N=doo*  
 昨日 雨=NOM よく 降る-PST2-IND=SFP  
 去年はよく雨が降ったよ

## 7.2.2 アスペクト

Comrie (1976) によると, まずアスペクトは「完結相 (perfective aspect)」と「非完結相 (imperfective aspect)」に大別される。「完結相」は, 事象全体を分割不可能な1つのまとまりとして示す一方で, 「非完結相」は, 事象の内的時間の特定の段階に言及する。

また「非完結相」は, さらに「習慣相 (Habitual)」と「継続相 (Continuous)」に分類される。「習慣相」は, 一定の期間に渡って繰り返し生じる動作や運動を表し, 「継続相」は, ある時点における動作の進行を表す「進行相 (Progressive aspect)」と, 状態の継続を表す「非進行相 (Non-progressive aspect)」に分類される。

また, これらの対立とは別に「完成 (perfect)」というアスペクトがある。これは, 英語の現在完了・過去完了などのように, 既に完了したが, 現在に影響が続いている過去の事象を示す。

Table 1. Classification of aspectual oppositions

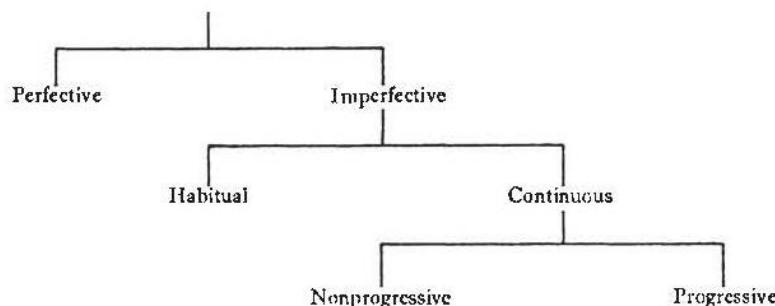


図 11 アスペクトの分類 (Comrie 1976: 25)

完結相は形態的に標示されない。非完結相のうち, 習慣相は主に語彙的に表される。ただ, 過去時制においては, 過去2接辞-*juta-*によって, 過去時制に付随する形で標示されることもある。

(121)は述語の *a-sji* 「遊ぶ」が過去2接辞-*juta-* (形態音韻規則により-*ita*) が接続し、過去に繰り返された習慣を表している。

- (121)    *wana*    *biidama=sji*    *asjib-ita-N*  
           1SG      ビー玉=INS      遊ぶ-PST2-IND  
           私は（昔）ビー玉で遊んだものだった。

継続相 (continuous) は継続接辞-*u*-によって表される。継続形が、ある時点における動作の進行を表す「進行相」を表すか、状態の継続を表す「非進行相」を表すかは、動詞の語彙的意味に左右される。継続接辞をつけるのが、「主体動作動詞」(工藤 2004, 動作に終了点が無い動詞や、客体の側に変化をもたらす主体の動作を捉える動詞)の場合「進行相」を表し、主体変化動詞(動作に終了点があり、主体の観点から変化を捉えている動詞)の場合「非進行相」を表す。

(122) は主体動作動詞 *nud-* 「飲む」が継続形であり、「今」の時点で進行している動作を表している。(123) は主体変化動詞 *ik-* 「行く」が継続形であり、発話時点ではなく、動作の結果状態が継続していることを表している。

- (122)    *nama*    *saki=du*    *nud-u-N=djaa*  
           今        酒=FOC      飲む-CONT-IND=SFP  
           今、酒を飲んでいるよ。  
 (123)    *akiko=wa*    *wadomari=cji*    *izj-u-N*  
           あきこ=TOP    和泊=ALL      行く-CONT-IND  
           あきこは和泊へ行っている（既に和泊にいる）。

完成相は「動詞の継起形+存在動詞 *a-*」の動詞連続によって表すことが出来る。

(124) は、主節の述語句が、主体変化動詞 *ik-* 「行く」の継起形と存在動詞 *a-* 「ある」によって形成されており、主節が表す動作が、副詞節 *wa=ga izjaN tuki* 「私が行ったとき」が表す時点において、既に完了していたことを表している。

- (124)    *wa=ga*    *izj-a-N*    *tuki=ni=wa*    *takasji=wa*    *duu*    *cjui=sji*  
           1SG=NOM 行く-PST-ADN 時=LOC=TOP たかし=TOP REFL 一人=INS  
           私が（たかしの家に）行った時には、たかしは自分一人で  
           *cjina=cji*    *izj-i*                    *at-a-N=doo*  
           知名=ALL 行く-SEQ      ある-PST-IND=SFP  
           知名へ行っていた。

### 7.2.3 エビデンシャリティー

国頭方言は、テンス・アスペクト形式と関連のあるものとして、視覚的エビデンシャリティー（目撃によって得られた情報）と推測（視覚的、または明白な証拠や結果に基づく）のエビデンシャリティーを示す形式がある。

二次的に視覚的エビデンシャリティーを表す形式として、過去2接辞-juta-が、二次的に推測エビデンシャリティーを表す形式として、「動詞の継起形+存在動詞 a-」の動詞連続がある。

-juta-は、主体変化動詞に接続し、過去のある時点において、話者が目撃した進行中の動作を表す。この用法は「目撃性を伴う」という特徴の為に、主語の人称に制限があり、一人称が主語となる文においては使えない。

(125)では、主体変化動詞 ik-「行く」が過去2接辞-juta-を取っているおり、「あきこがバタバタと A コープへ行く」途中の様子を、話者が目撲したことを表している。

- (125) *akiko=wa batabata sj-i eekoopu=cji ic-juta-N.*  
あきこ=TOP バタバタ する-SEQ A コープ-ALL 行く-PST2-IND  
あきこはバタバタして A コープへ向かっている途中だった。

「継起形+存在動詞 a-」は、直接目撲したのではなく「何らかの痕跡を元に事態を推量した」ことを表す用法がある。(126)では、主体変化動詞 mudu-「帰る」の継起形と存在動詞 a-「ある」が述部を形成し、「荷物が無い」という証拠から、「あきこが帰った」ことを推測していることを表している。仮に、「あきこが帰った」ことを目撲した場合には、mudut-a-N「戻った」のように、過去1接辞を用いた形式を用いる。

- (126) *akiko=wa naa mudut-i {a-ssa / a-N}*  
あきこ=TOP もう 帰る-SEQ ある-MRT/-IND  
(荷物が無いのを見て) あきこはもう帰ったみたいだ。

### 7.3 ムード・モダリティ

国頭方言のムード・モダリティの概説として、動詞の主な活用語尾(5.3を参照)が表す法と、主なモダリティについて記述する。記述事項の選定には、風間(2011)を参考にした。

#### 7.3.1 直説法

話し手が事実として叙述する法を「直説法」と呼ぶ。直説法は直説接辞-Nによって表される。(127)は動詞述語が直説法を取り、事実を述べている。

- (127) *kiNnjuu ami fut-a-N*  
昨日 雨 降る-PST-IND

昨日雨が降った。

### 7.3.2 禁止法

禁止法は禁止接辞-*rūna* によって表される。(128)は動詞述語の *u-*「いる」に禁止接辞-*rūna* が接続し(形態音韻規則により *ru*→*N*)、動作を禁止する文になっている。

- (128) *maa=ni=wa u-Nna*  
 ここ=LOC1=TOP いる-PROH  
 ここにはいるな。

### 7.3.3 意志・勧誘法

意志や勧誘を表す法は意志接辞-*raa* によって表される。(129)は動詞述語の *u-*「いる」に意志接辞-*raa* が接続し、聞き手を勧誘する文になっている。

- (129) *agu=sji u-raa*  
 一緒に=INS いる-INT  
 一緒にいよう。

### 7.3.4 命令法

相手への命令を表す法は命令接辞-*ri* によって表される。(130)は動詞述語の *ik-*「行く」が命令接辞-*ri* を接続し、聞き手に命令する文になっている。

- (130) *hee-sa ik-i*  
 早い-ADJ 行く-IMP  
 早く行け。

### 7.3.5 希望

話者の希望を表す標識として、補助形容詞の *bu-*「～したい」がある。(131)は、動詞 *nibu-*「眠る」の連用形と補助形容詞 *bu-*が述部を形成し、命題が話者の希望であることを表している。

- (131) *hee-sa nibu-i+bu-sja-N*  
 早い-ADJ 眠る-INF+欲しい-ADJ-IND  
 早く眠りたい。

### 7.3.6 確信

話者が確信していることを表す手段として、形式名詞 *hazji* 「～はず」がある。(132) は *hazji* 「はず」が連体節を取り、節内の内容を話者が確信していることを表している。

- (132) *mizji num-as-iba Maa=wa duku-sa na-ju-nu hazji*  
水 飲む-CAUS-COND 馬=TOP 元気-ADJ なる-NPST-ADN はず  
水を飲ませば馬は元気になるはず。

### 7.3.7 推量

発話内容が話者の推量であることを表す方法として、終助詞=*daru* 「だろう」がある。(133) は述語に=*daru* が接続し、文の命題が推量内容であることを表している。

- (133) *naacja=wa hari-ju-N=daru*  
明日=TOP 晴れる-NPST-IND=EPI  
明日は晴れるだろう。

### 7.3.8 可能性

話者が可能性を提示する標識として、終助詞=*kamu* がある。(134) は文末に終助詞=*kamu* が接続し、命題は話者が可能性を感じている内容であることを表している。

- (134) *kiNgjo=wa jowat-u-N=tu naacja=wa sjin-ju-N=kamu=jaa*  
金魚=TOP 弱る-CONT-IND=CSL 明日=TOP 死ぬ-NPST-IND=EPI=SFP  
金魚は弱っているから、明日は死ぬかもね。

### 7.3.9 感覚による判断

話者が何かしらの情報によって判断を下していることを表す方法として、補助形容詞 *gi-* 「～そうだ」がある。(135) は述語に *gi-* 「～そうだ」が接続し、命題内容が話者の判断であることを表している。

- (135) *fuN kiNgjo=wa naa sjin-i+gi-sa-N*  
この 金魚=TOP もう 死ぬ-INF1+EVID-ADJ-IND  
この金魚はもう死にそうだ。

### 7.3.10 伝聞

話者が聞いた情報を示す標識に、引用助詞=*di* がある。(136) は、文末に引用助詞=*di* が接続することで、命題内容は話者が伝聞によって得た情報であることを表している。

- (136) *kiNnjuu=wa acjimai=wa taN=mu fuu-danat-a-mu=di*  
 昨日=TOP 集まり=TOP 誰=ADD 来る-NEG-PST-EVID=QUOT  
 昨日は、集まりは誰も来なかつたんだって。

## 7.4 待遇表現

国頭方言の敬語は、形態的に尊敬語と丁寧語に分類することが出来る。尊敬語は話題の人物が敬意の対象である場合に用いられ、丁寧語は聞き手が敬意の対象である場合や、より丁寧な発話を配慮した際に用いられる。ただし、実際の使用場面で尊敬語・丁寧語を区別する意識は希薄で、両者は共に「敬い語」として意識されている。敬い語を使う条件として、話題の対象／聞き手が、(a) 自分よりも年上であること（上下関係）、(b) 初めて会うなど親しみの低いこと（親疎関係）が挙げられる。なお、例え聞き手が身内以外の人物であっても、身内内の敬語（例えば祖父への尊敬表現）を使うことができ、聞き手との関係で話題の人物への待遇が変化する相対敬語的な性質は、日本標準語に比べ低いと思われる。

### 7.4.1 尊敬語

尊敬語には語根自体が尊敬を表す語と、補助動詞によって尊敬を表す表現がある。語根自体が尊敬の意味を持つ語は、名詞の2人称尊称形 *nata*「あんた」、動詞の *moo-*「いらっしゃる（行く・来る、いる）」、*Mee-*「いらっしゃる（いる）」、*mois-*「死ぬ」、*oisji-*「飲む」「食べる」である。補助動詞が尊敬の意味を持つ語は、連用形2に接続する *sjoo-ri*「下さい」と、動詞の継起形に接続する補助動詞 *tabo-ri* がある。

(137)では *moojui* が「行く」の尊敬の意味を持つ語根であり、敬意の対象である聞き手への質問として使われている。(138)は動詞 *sjii-*「する」の継起形 *sjii* に *tabo-*「給う」が接続し、目上の聞き手に対する依頼表現となっている。

- (137) *icji misakiziNzja=cji=wa moo-ju-i=joo?*  
 いつ 岬神社=ALL=TOP 行く.HON-NPST-WHQ=WHQ  
 いつ岬神社へいらっしゃる（行く）のですか？
- (138) *duku-sa sj-ii tabo-ri=joo*  
 元気-ADJ する-SEQ くれる.HON-IMP=SFP  
 お元気でいらっしゃってください（お年寄りに）

### 7.4.2 丁寧語

丁寧語には、終助詞で丁寧を表す語と、接辞によって丁寧を表す表現がある。丁寧の意味を持つ終助詞は、=diro 「～です」である<sup>12</sup>。接辞は、動詞語幹に接続する丁寧接辞-jabu-がある（活用については、5.3 を参照）。

普通体の表現では、疑問詞 *taru* 「誰」の後に直接疑問助詞が接続するのに対し(139)0、丁寧体の表現(140)、は *taru* の後に=diro という丁寧の終助詞が使われている。(141)は動詞 *ik-*が丁寧接辞-jabu-で屈折し、聞き手に配慮した丁寧な文になっている。

- (139)    *ura taru=joo?*        *wana akiko=doo*  
2SG 誰=Q                          1SG あきこ=SFP  
あんた誰？                          私はあきこだよ。

- (140)    *nata taru=diro=joo?*    *wana akiko=diro.*  
2SG.HON 誰=POL=WHQ            1SG あきこ=POL  
あなたは誰ですか？                  私はあきこです。

- (141)    *kiNnjuu wana nicijoobi ja-sjiga gakkoo=cji ic-jabut-a-N*  
昨日 1SG. TOP 日曜日 COP-CNC 学校=ALL 行く-POL-PST-IND  
昨日、私は日曜日だけど学校へ行きました。

## 8. 自由談話

以下は 2013 年 1 月に国頭集落の田畠孝子氏（昭和 27 年生）から伺った昔話のテキスト「米と麦と粟の姉妹」である。同氏が幼少時代に祖母から聞かされたものだという。*φumi*（米）, *muzji*（麦）, *oo*（粟）の三姉妹が登場し、食べ物の大切さを説く内容になっている。途中、標準語にコード・スイッチングしている箇所は <> で記した。

- 001 <*mukaasji mukasji aru tokoroni*>  
昔 昔 ある ところ=LOC  
昔むかしあるところに

- 002 *ano seekacu=mu muuru <juufukude> kuracj-ut-a=tu=wa*  
FIL 生活=ADD 全部 裕福=で 暮らす-CONT-PST=COND3=TOP  
生活もとても裕福にくらしていたら、

<sup>12</sup> 横山（2017）の 6 章では diro を「コピュラ動詞」として扱っていたが、屈折がない形態素であるため「終助詞」に解釈を修正した。

003 *ano kura=nu cukut-i at-i*

FIL 蔵=NOM 作る-SEQ ある-SEQ

蔵が作ってあって,

004 <*sono ie=wa=ne kura=ga at-te*>

その 家=TOP=SFP 蔵=NOM ある-SEQ

その家はね、蔵があつて

005 <*sore=ni kome=jara anoo mugi awa zeeNbu cume ko-Nde*>

DEM=ALL 米=SEL FIL 麦 粟 全部 詰める-INF 込む-SFP

それに米や、麦、粟ぜんぶ詰め込んで

006 <*sore=de moo nani fuzjijuu*> *naa-Nko kuracj-ut-a-mu=di*

それ=INS もう 何 不自由 ない-SEQ 暮らす-CONT-PST-EPI=QUOT

それでもう、何不自由なく暮らしていたんだって。

007 *gaN sj-a=tu=wa ano nuNgurasji naa haNsji kuracj-i*

そう する-PST=COND3=TOP FIL FIL もう こうして 暮らす-SEQ

こうして暮らしていく

008 *haNsji sj-u-ta=tu=wa*

こうして する-CONT-PST=COND1=TOP

こうしていたら

009 *kome=ga icjibaN saki=kajaa=dicji kii-ta-ra*

米=NOM 一番 先=Q=QUOT 聞く-PST-COND2

「米が一番先かな？」って（田畠さんがおばあちゃんに）聞いたら

010 *jaa icjibaN saisjo=wa muzji=nu muzji=du neesaN*

INTJ 一番 最初=TOP 麦=NOM 麦=FOC 姉さん

(おばあちゃんは) 「いや、一番最初は麦、麦が姉さん

011 *sono cugi=ga awa=ga zizjo=ga awa*

その 次=NOM 粟=NOM 次女=NOM 粟

その次が粟、次女が粟

- 012 *saNbaNme=ni Maarit-a-nu muN=ga fumi=doo=jaa=di icj-i*  
 三番目=LOC 生まれる-PST-ADN 物=NOM 米=SFP=SFP=QUOT 言う-SEQ  
 三番目に生まれたのが米だよ」って。
- 013 *fumi=nu deki-ti gaNsjisjiisjatana hoNto=ni hoosaku sji-i*  
 米=GEN 出来る-SEQ そうしたら 本当=ADV 丰作 する-SEQ  
 米が出来て、 そうしたら本当に丰作で
- 014 *haNsji tu-ra-ti haNsji cum-e+<ko-Nde> sjiisjatuwa*  
 こうして 取る-POT-SEQ こうして 詰める-INF+<込む-SEQ> していたら  
 たくさん取れて、 それをこうして（蔵に）詰め込んだら、
- 015 *cjui=nu kwaa=nu haNsji kam-i-nu tuki=ni*  
 1人=GEN 子供=NOM こうして 食べる-NPST-ADN 時=LOC  
 1人の子供が食べる時に
- 016 *moo sjita=ni=na utusj-i+cjaacj-i*  
 もう 下=LOC=SFP 落とす-INF+散らかす-SEQ  
 もう下に落とし散らかして
- 017 <*moo zeNbū otosji-te fukuzacu=ni tabe-te*>  
 もう 全部 落とす-SEQ 複雜=ADV 食べる-SEQ  
 もう全部落として複雜に食べて
- 018 *gaNsji <moo> naa baa naa baa*  
 そして もう もう 嫌 もう 嫌  
 そして「もういらない、 もういらない」
- 019 *gaNsji uticj-i a-ta=tu=wa*  
 そして 落とす-SEQ ある-PST=COND3=TOP  
 そして落としていたら、
- 020 *anu=joo wara-Ncja anu nuNgura gaN sj-u-ru=tu=wa*  
 あの=SFP 子供-PL FIL FIL そう する-NPST-MSB=COND3=TOP  
 「あのねーあんた達、 そんな風にしていると

021 *fumi+ganasi=ni=mu burii naj-u-N=tuni nuNgura*

米+神=DAT=ADD 無礼 なる-NPST-IND=CSL FIL

お米の神様に無礼だから

022 *muzji=mu awa=mu ucja=ni kam-a-ju-nu tame=du*

麦=ADD 粟=ADD 2PL=DAT 食べる-POT-ADN 為=FOC

麦も粟もあんた達に食べられる為に

023 *haNsji cjukkee cjukkee fusji fusji*

こうして 1つ 1つ 節 節

1つ1つ, 節々

024 *uudo nat-i ic-ju-N=doo=jaa=di icj-i*

大きく なる-SEQ 行く-NPST-IND=SFP=SFP=QUOT 言う-SEQ

大きくなっていくんだよって

025 *aa gaN=kajaa=dicji unu wara-Ncja=wa gaNsjiisjatuwa*

INTJ そう=Q=QUOT その 子供-PL=TOP そうしたら

「ええ、 そうなのー？」ってその子供たちは

026 *ippai kura=ni ippai sumi=mu muzji=mu awa=mu*

いっぱい 蔵=LOC いっぱい 米=ADD 麦=ADD 粟=ADD

「蔵にいっぱい、 米も麦も粟も

027 *muuru gaba a-maze=joo ama=di icj-i*

全部 たくさん ある-CONF=SFP 母=QUOT 言う-SEQ

全部たくさんあるでしょ？お母さん」と言って

028 *gaNsjiisjatu ee gaN=naa=di icj-i*

そうしたら INJ そう=YNQ=QUOT 言う-SEQ

「ええー？ そうなのー？」と（子供たちは）言って

029 *gaNsjiisjutatuwa muN nuku-riba hanagi-ti gaNsji naa*

そうしたら 食べ物 残る-COND1 捨てる-SEQ そして もう

食べ物が残れば捨てて、 そしてもう

030 *duu-naa=nu wata=nu ippai na-riba naa hanagit-i*  
REFL-PL=GEN 腹=NOM 一杯に なる-COND もう 捨てる-SEQ  
自分たちのお腹がいっぱいになれば捨てて

031 *gaNsjanu kurasji sj-ut-a=tu=wa*  
そんな 暮らし する-CONT-PST=COND3=TOP  
そんな暮らしをしていたら,

032 *koNdo=wa kura=nu naa=kara*  
今度=TOP 蔵=GEN 中=ABL  
今度は蔵の中から,

033 *junaanu nizji=bee nat-a=tu=wa*  
夜中=GEN 二時=APPR なる-PST=COND3=TOP  
夜中の二時くらいになると

034 *guzja-guzja-guzja=dicji hanasji=nu cjikat-i*  
ONM-RDP-RDP-RDP=QUOT 話=NOM 聞こえる-SEQ  
ぐじやぐじやぐじやぐじや...と話が聞こえて

035 *haNsjita nuu=kajaa=dicji naa maa=nu ama=wa=naa uit-i*  
こうして 何=Q=QUOT もう ここ=GEN 母=TOP=SFP 起きる-SEQ  
「何かな？」とこの家のお母さんは起きて

036 *gaNsji kicj-i=ga haNsji nuzucj-i micj-a=tu=wa*  
そうして 来る-SEQ=? こうして 覗く-SEQ 見る-PST=COND3=TOP  
こうして覗き見をしたら

037 *guzja-guzja-guzja-guzja tooraa=nu moo muni icj-u-N=gii*  
ONM-RDP-RDP-RDP=QUOT たわら=NOM もう 言葉 言う-CONT-IND=EVID  
ぐじやぐじやぐじやぐじや...僕が何か言っているんだって。

038 *haNsjatuwa nuudi agaNsjanu fui=nu cjik-a-ru=kajaa=di*  
こうしたら なんで あんな 声=NOM 聞く-POT-MSB=Q=QUOT  
「なんであんな声が聞こえるんだろう？」と

039 *Muut-i kura=nu sjaa=nu juu-cji=nu hasjira=ni mimi cjikit-i*  
 思う-SEQ 蔵=GEN 下=GEN 4つ=GEN 柱=LOC 耳 つける-SEQ  
 思って、蔵の下の4本柱に耳をつけて

040 *joo sj-ut-i haNsji cjcj-a-mu=di cjcj-a=tu=wa*  
 じっと する-CONT-SEQ こうして 聞く-PST-EPI=QUOT 聞く-PST=COND3=TOP  
 じっと聞いていたんだって。聞いていたら

041 *koNdo=wa muzji=nu icjibaN ui=nu neNneN=ga*  
 今度=TOP 麦=GEN 一番 上=GEN 姉=NOM  
 今度は、一番上の麦のお姉さんが

042 *wana=joo naa maa=nu jaa=ni=wa baa=djaa=di icj-i*  
 1SG=SFP もう ここ=GEN 家=LOC=TOP 嫌=SFP=QUOT 言う-SEQ  
 「私はね、もうこここの家に（いるの）は嫌だ」と言って

043 *issjookeNmee wana fudit-i haNsji muuru=ni kam-a-ju-sjiga*  
 一生懸命 1SG 育つ-SEQ こうして 全部=LOC 食べる-POT-NPST-CNC  
 私は一生懸命大きくなって、全部食べられるけど

044 *wacja=wa=naa nuu=nu gutu=sji hjiicjarasj-i*  
 1PL=TOP=SFP 何=GEN こと=INS ひつ散らかす-SEQ  
 私達はあんな風に、ひつ散らかして

045 *muuru hanagi-ra-ti=du uN=doo=ja=di icj-i*  
 全部 捨てる-PASS-SEQ=FOC いる=SFP=SFP=QUOT 言う-SEQ  
 全部捨てられているんだよ」と言って。

046 *haNsjisjatuwa sjaa wacja=mu=kajaa=dicji icj-i*  
 こうしていたら EMPH 1PL=ADD=Q=QUOT 言う-SEQ  
 そしたら（妹達が）「私達もかな？？」と言って

047 *ucja=mu jii=nu muN=doo=di icj-i gaNsjisjatuwa naa*  
 2PL=ADD 同じ=GEN もの=SFP=QUOT 言う-SEQ そしたら もう  
 （お姉さんは）「あんた達も同じだよ」って、そしたらもう

- 048 *gaNsjiriba*    *wana=mu*    *wana=mu*    *fa-ju-mu=di*                          *icj-i*  
 そうすると 1SG=ADD 1SG=ADD 同行する-NPST-EPI=QUOT 言う-SEQ  
 そうすると (妹は) 「私も同行する」と言って
- 049 *sjiisjatuwa*    *gaNsjatuwa*    *koNdo=wa=na*    *icjibaN*    *sjaa=nu*  
 そうしたら そうしたら 今度=TOP=SFP 一番 下=GEN  
 そうしたら今度は、一番下の、
- 050 *naa*    *nibaNme=ni*    *Maari-ta-nu*                          *anu*  
 もう 二番目=LOC 生まれる-PST-GEN FIL  
 二番目に生まれた
- 051 *nuNgurasji*    *awa=mu*    *sjima=nu*    *muni=sji*    *oo=di=du*                          *Juu-sjiga*  
 FIL 粟=ADD 島=GEN 言葉=INS 粟=QUOT=FOC 言う-CNC  
 粟も島の言葉では「オ一」って言うけど
- 052 *oo=mu*    *neNneN*    *wana=mu*    *faj-u-mu=dicji*                          *icj-i*  
 粟=ADD 姉 1SG=ADD ついて行く-NPST-QUOT=QUOT 言う-SEQ  
 粟も「お姉さん、私も同行する」って
- 053 *sjiisjatuwa*    *gaN=naa=di*                          *icj-i*                          *gaN=njaa*    *ura=mu*  
 していたら そう=SFP=QUOT 言う-SEQ そう=COND1 2SG=ADD  
 そうしたら「そうかー、 そうしたらあんたも
- 054 *ika-a=gaa=di*                          *icj-i*                          *uda=ka=cji*    *acj-i*                          *ik-iba*  
 行く-INT=EMPH=QUOT 言う-SEQ どこ=カ=ALL 歩く-SEQ 行く-COND  
 行くよー、 どこかへ歩いて行けば
- 055 *jukwa=nu*    *jaa=nu*    *tomi-ra-ju-nu*                          *nii=cji*  
 良い=GEN 家=NOM 探す-POT-NPST-ADN ところ=ALL  
 良い家が見つかるところに
- 056 *wacja*    *ik-a=gaa=di*                          *icj-i*                          *sjiisjatuwa*  
 1PL 行く-INT=EMPH=QUOT 言う-SEQ していたら  
 私達は行こう」と言って、 そうしたら

- 057 *iN naa maa=nu jaa=ni=wa ura-ra-N=di icj-i*  
 うん もう ここ=GEN 家=LOC=TOP いる-POT-IND=QUOT 言う-SEQ  
 「うん、もうこの家にはいられない」と言って
- 058 *gaNsjiisjatuwa mata icjibaN sjaa=nu fumi=mu*  
 そうしたら また 一番 下=GEN 米=ADD  
 そうしたらまた一番下の米も
- 059 *waN=mu faj-u-N=djaa aja-gwaa=di icj-i*  
 1SG=ADD 同行する-NPST-IND=SFP 姉-DIM=QUOT 言う-SEQ  
 「私も同行するよお姉さん」と言って
- 060 *nibaNme=nu aja=wa aja-gwaa=dicji ju-N=du jat-i*  
 二番目=GEN 姉=TOP 姉-DIM=QUOT 言う-IND=FOC COP-SEQ  
 二番目の姉は「アヤグワー」って言うからね。
- 061 *gaNsji aja-gwaa=wa waa=mu faj-u-N=dicji icj-i*  
 そして 姉-DIM=TOP 1SG=ADD 同行する-NPST-IND=QUOT 言う-SEQ  
 そして次女は「私も同行する」って
- 062 *gaNsjisjiina haNsji muuru izj-i*  
 そして こうして 全部 行く-SEQ  
 そして、全部（の姉妹）が行って
- 063 *gudoo-gudo=sji haNsji izjiti izji sjigata mjaa-ra-sjiga*  
 ONM-RDP=INS こうして 出る-SEQ 行く-SEQ 姿 見える-NEG-CNC  
 ぐどぐどって出でいく姿は見えないけど
- 064 *haNsji icjibaN saisjo=ni muzji=nu neNneN=ga izjit-i*  
 こうして 一番 最初=LOC 麦=GEN 姉=NOM 出る-SEQ  
 一番最初に麦のお姉さんが出て
- 065 *haNsji zjoo=cji izjit-i izj-i uN=ga atu=kara*  
 こうして 門=ALL 出る-SEQ 行く-SEQ それ=GEN 後=ABL  
 門へ出て行って、その後から

066 *oo=nu cjcj-i izj-i haNsji*

栗=NOM つく-INF 行く-SEQ こうして

今度は栗がついて行って、

067 *uN=ga atu=kara sumi=nu cjcj-i izj-i gaNsji sjiijsjata*

それ=GEN 後=ABL 米=NOM つく-INF 行く-SEQ そうして したら

その後から米がついて行って、 そうしたら

068 *aa naa wacja jaa=wa saigo=du a=ssa=jaa=di icj-i*

ああ もう 1PL 家 最後=FOC ある-SFP=SFP=QUOT 言う-SEQ

「ああ、 もう私達の家は最後だねー」って言って

069 *uN ama=wa=na uturusja sjiwa sji-i*

その 母=TOP=SFP とても 心配 する-SEQ

そのお母さんはとても心配して

070 *wacja naasj-it-a-nu naa munu=nu naa sumi=mu oo=mu*

1PL 作る-CONT-PST-ADN もう もの=GEN もう 米=ADD 粟=ADD

「私達が作っていたものは、 もう米も粟も

071 *muuru muzji=mu muuru kam-a-ra-N=gara waka-ra-N=jaa*

全部 麦=ADD 全部 食べる-POT-NEG-IND=EPI 分かる-NEG-IND=SFP

全部、 麦も全部食べられないかも分からなーなー

072 *futabi=daki=du ano nuNgurasji to-ra-ju-N=garaa=di icj-i*

今年=LIM=FOC FIL FIL 取る-POT-NPST-IND=EPI=QUOT 言う-SEQ

今年だけ取れないかなー？」と言つて

073 *naa uturusja sjiwa sji-i ut-a-nu munu=ga*

もう とても 心配 する-SEQ いる-PST-ADN もの=CEX

もうとっても心配していたら、

074 *jani=nu tusji=ni nat-i futusji cukut-a-nu munu=wa*

来年=GEN 年=LOC なる-SEQ 今年 作る-PST-ADN もの=TOP

次の年に、 その年に作ったものは

075 *muuru kad-i mata jaa=ni nuNgurasjii muzji uit-i*  
 全部 食べる-SEQ また 家=LOC FIL 麦 植える-SEQ  
 全部食べて、また家に麦を植えて

076 *oo ui-ti mata fumi uit-i sj-a-nu muN=ga*  
 粟 植える-SEQ また 米 植える-SEQ する-PST-ADN もの=CEX  
 粟を植えて、また米を植えて、そうしたけれど

077 *haNsja=nu muN=ga muzji=mu=naa cjiibu to-radana*  
 こうして=GEN もの=CEX 麦=ADD=SFP ちっとも 取れる-NEG  
 麦もちっとも取れなくて

078 *haNsji mata sjiisjatu mata*  
 こうして また そうしたら また  
 そうしてまた

079 *oo=nu zjiki=ni mata oo=mu haN na-ju-mu=naa=di icj-i*  
 粟=GEN 時期=LOC また 粟=ADD そう なる-NPST-EPI=Q=QUOT 言う-SEQ  
 「粟の時期にまた粟もそうなるかな?」と言って

080 *naa wacja nuu kad-i ikicj-i <iko>=kajaa=di icj-i*  
 もう 1PL 何 食べる-SEQ 生きる-INF 行こう=Q=QUOT 言う-SEQ  
 私達は何を食べて生きて行こうかー」と言って

081 *naa icjasji=mu fumi ui-ra-nja*  
 もう 少し=ADD 米 植える-NEG-COND2  
 少しでも米を植えなきや、

082 *fumi=nu muN na-i=du s-ju-ru=di*  
 米=GEN 食べ物 なる-Q=FOC する-NPST-MSB=QUOT  
 食べ物がないといって、

083 *haNsjata fumi uit-i-mu aNmai deki-radana*  
 こうして 米 植える-SEQ=ADD あんまり 出来る-POT-NEG.SEQ  
 米を植えてもあんまり出来なくて

- 084 *haNsjii=naa hjiikam-i=nu muN=mu naa=ni nat-i*  
 こうして=SFP 日 食べる-NPST=GEN もの=ADD ない=LOC なる-SEQ  
 毎日食べるのも無くなつて
- 085 *koNdo=wa umu mazjirit-aja ano oo+faa irit-aja*  
 今度=TOP 芋 混じる-ENU FIL 青+葉 入れる-ENU  
 今度は芋混ぜたり， 青葉入れたり
- 086 *mazjirit-ut-i misjizji sj-aja kee tacj-aja*  
 混じる-CONT-SEQ おじや する-ENU お粥 炊く-ENU  
 混ざついて， おじやをしたり， お粥をたいたり
- 087 *sj-u-ti wata+kucji micjit-i=ja gaNsjisjiisjatuwa*  
 する-CONT-SEQ 腹+口 満ちる-SEQ=SFP そして  
 お腹を満たして， そして
- 088 *aa gaN=du at-a-saa*  
 INTJ そう=FOC ある-PST-MRT  
 ああそうだった
- 089 *wara=Ncja wara-Ncja maa=cji fuu*  
 子供-PL 子供-PL ここ=ALL 来る.IMP  
 「子供たち， 子供たち， こっちへおいで」
- 090 *gaNsji uN ama=tu acja=tu=ga abit-i*  
 そして この 母=COM 父=COM=NOM 呼ぶ-SEQ  
 そしてお母さんとお父さんが呼んで
- 091 *maa=ni muuru ji-i+sjit-i ucja=ga fuN fumi=mu*  
 ここ=LOC 全部 座る-INF+させる-SEQ 2PL=NOM この 米=ADD  
 ここに全部座らせて， あんた達がこの米も
- 092 *oo=mu muzji=mu muuru utusj-i cjaacj-i sj-ut-i*  
 粟=ADD 麦=ADD 全部 落とす-INF 散らかす-SEQ する-CONT-SEQ  
 粟も麦も全部， 落とし散らかしていく

093 *muN deki-ra=ni nat-a-mu kwa-Ncja=di icj-i*  
 食べ物 出来る-POT=LOC なる-PST-EPI 子-PL=QUOT 言う-SEQ  
 食べ物が出来なくなつたんだよ、子供たち」と言って

094 *haNsjikicji ara gaN=doo=jaa gaN <da-tta>=sa=jaa=di icj-i*  
 そうして INTJ そう=SFP=SFP そう COP-PST=SFP=SFP=QUOT 言う-SEQ  
 そうしたら「あら、 そうだったのかー」と（子供が）言って

095 *muN=wa muuru deezji=ni sji-i*  
 食べ物=TOP 全部 大事=LOC する-SEQ  
 食べ物は全部大事にして

096 *na-ra-sa=jaa=di icj-i gaNsji=du hanasj-a-N=tuni*  
 なる-POT-SFP=SFP=QUOT 言う-SEQ そうして=FOC 話す-PST-IND=CSL  
 食べなきゃならないよ」と言って、 そうして話したから

097 *gaNsji=du ucja=mu muuru anu nuNgura*  
 そうして=FOC 2PL=ADD 全部 FIL FIL  
 「あんた達も、 全部

098 *seekacu sji-i-cja=tu kam-i=ni=wa hjiikure*  
 生活 する-SEQ-COND 食べる-NPST=LOC=TOP 日 三食  
 生活しながら食べるには、 1日に三食

099 *arigata-saa=di Muut-i cji mu=ni sumit-i anu nuNgurasji*  
 有り難い-ADJ=QUOT 思う-SEQ 肝=LOC 染める-SEQ FIL FIL  
 一日三食、 有り難いなーと思って、 肝に染めて

100 *muN kam-i=joo=jaa=dicji iicj-i gaNsji sji-i=gane*  
 食べ物 食べる-IMP=SFP=QUOT 言う-SEQ そうして する-INF=CSL  
 食べ物食べなさいよ。

102 *gaNsja=nu seekacu=du sji-i=nu=du ucja=mu*  
 そうして=GEN 生活=FOC する-SEQ=GEN=FOC 2PL=ADD  
 そうした生活をして、 あんた達も

103 *cjura-sa sj-ut-i cjimu+kukuru cjura-sa sj-ut-i*  
きれい-ADJ する-CONT-SEQ 肝+心 きれい-ADJ する-CONT-SEQ  
肝心をきれいにして

104 *mata fumi=mu cju+cjibu haNsji kam-i-nu=du*  
また 米=ADD 1+粒 こうして 食べる-NPST-ADN=FOC  
米も 1 粒こうして食べる時には

105 *arigatai=jaa=dicji tii oocj-ut-i muN*  
有り難い=SFP=QUOT 手 合わせる-CONT-SEQ 食べ物  
手を合わせて食べ物を

106 *kam-i=joo=jaa=di icj-i gaNsji=gane=du*  
食べる-IMP=SFP=QUOT そうして=CSL=FOC  
食べなさいよー」と言ったって。

107 *gassaa=doo=jaa=dicji hanacj-i agari tuu-sa ii tuu-sa=dicji*  
それだけ=SFP=SFP=QUOT 話す-SEQ 東 遠い-ADJ 西 遠い-ADJ  
(お婆ちゃんは) 「それだけ」と話したよ。おしまいおしまい

## 略号一覧

表 31 略号一覧

略号	機能	日本語訳	略号	機能	日本語訳
ABL	ablative	奪格	INTJ	interjection	感動詞
ADD	additional	付加	INS	instrumental	具格
ADJ	adjective	形容詞	INT	intentional	意図
ADN	adnominal	連体	LIM	limitative	限界格
ADVL	adverbalization	副詞化	LOC	locative	場所格
ALL	allative	向格	MRT	mirativity	意外性
APPR	approximate	近似	MSB	<i>kakari-musubi</i>	係り結び
CAUS	causative	使役	NEG	negation	否定
CMP	comparative	比較格	NOM	nominative	主格
CNC	concessive	逆接	NPST	non-past tense	非過去
COMP	complementizer	補文標識	ONM	onomatopoeia	オノマトペ
COM	comitative	共格	PASS	passive	受動
COND	conditional	条件	PL	plural	複数
CONF	confirmation	確認	POL	politeness	丁寧
CONT	continuous	継続相	POT	potential	可能
COP	copula	コピュラ	PROH	prohibition	禁止
CSL	causal	原因	PST	past tense	過去
DAT	dative	与格	Q	question	疑問
DIM	diminutive	近称	QUOT	quotative	引用
DU	dual	双数	RED	reduplication	重複
EMPH	emphasis	強調	REFL	reflexive	再帰代名詞
ENU	enumerative	列挙	REP	reported	伝聞
EPI	epistemic	認識	RED	reduplication	重複
EVID	evidential	証拠	SEL	selective	選択
FIL	filler	フィラー	SFP	sentence-final particle	終助詞
EXM	exemplative	例示	SG	single	単数
EXP	explanation	説明	TERM	terminative	終局格
FOC	focus	焦点	TOP	topic	主題
GEN	genitive	属格	YNQ	yes-no question	肯否疑問
HON	honorative	尊敬	WHQ	wh-question	内容疑問
IMP	imperative	命令	1	first person	一人称

IND	indicative	直説	2	second person	二人称
INF	inflinitive	連用	3	third person	三人称
			<>	共通語	

## 参考文献

- 上野善道 (2000) 「奄美方言アクセントの諸相」『音声研究』4(1): 42–54. 日本音声学会.
- 風間伸次郎 (2011) 「テーマ企画：特集 モダリティ」『語学研究所論集』16: 29–55. 東京外国語大学.
- 工藤真由美編 (2004) 『日本語におけるアスペクト, テンス, モダリティー標準語研究を超えて』東京：ひつじ書房.
- 名嘉真三成 (1992) 『琉球方言の古層』602–637. 東京：第一書房.
- 服部四郎 (1960) 『言語学の方法』東京：岩波書店.
- 横山晶子 (2017) 『琉球沖永良部島国頭方言の文法』一橋大学博士論文.
- 横山晶子 (2020) 「自然談話において焦点呼応はいつ現れるか？－琉球沖永良部国頭方言の場合－」『第 161 回日本言語学会予稿集』71-77.
- 横山晶子 (2021) 「しまむに意識調査報告書」  
<https://docs.google.com/document/d/1VuYYYYGrmnwyPJ3HEggMubJTjMWGZ9a7cqp5nfSg0-E/edit?usp=sharing> (2022 年 3 月 1 日アクセス)
- 横山晶子・籠宮隆之 (2018) 「言語実験に基づく言語衰退の実態の解明－琉球沖永良部島を事例に－」『方言の研究』5: 353–375. 東京: ひつじ書房.
- ローレンス・ウェイン (2006) 「沖縄方言群の下位区分について」『沖縄文化』40(2): 87–101. 沖縄：沖縄文化協会.
- Comrie, Bernard (1976) *Aspect: An introduction to the study of verbal aspect and related problems*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dixon, R. M. W. (1979) Ergativity. *Language* 55: 59–138. Linguistic Society of America.
- Dixon, R. M. W. (2004) Adjective classes in typological perspective. In R.M.W. Dixon and Alexandra Y. Aikhenvald (eds.) *Adjective classes: A cross-linguistic typology*. 1-49. Oxford: Oxford University Press.
- Hajek, John (2006) Adjective classes: What can we conclude? In R.M.W. Dixon and Alexandra Y. Aikhenvald (eds.) *Adjective classes: A cross-linguistic typology*. 348-361. Oxford: Oxford University Press.
- Igarashi, Yosuke (2015) Intonation. In: H. Kubozono (ed.) *Handbook of Japanese phonetics and phonology*, 525–568. Berlin: Walter de Gruyter.
- Ishihara, Shinichiro (2015) Syntax-prosody interface. *Handbook of Japanese phonetics and phonology*, 569–618. Berlin: Walter de Gruyter.

- Ito, Junko (1990) Prosodic minimality in Japanese. In: Ziolkowski, M., Noske, M., and Deaton, K. (eds), *Proceedings of Chicago Linguistic Society 26: Parasession on the Syllable in Phonetics and Phonology*, 213–239. Chicago Linguistic Society, Chicago.
- Kibe, Nobuko, Kohei Nakazawa and Akiko Yokoyama (2021) Grammatical relations in Japonic. Proceedings of the second meeting of the Academic Year 2020 of the Joint Research Project on “Studies in Asian and African Geolinguistics. In press.
- Lambrecht, Knud (1994) *Information structure and sentence form: Topic, focus, and the mental representation of discourse referents*. In: Cambridge studies in linguistics 71. Cambridge: Cambridge University Press.
- Pellard, Thomas (2015) The linguistic archaeology of Ryukyu Islands. In Heinrich, Patrick, Shimoji, Michinori and Shinsho Miyara (eds.) *Handbook of the Ryukyuan languages*.13-37. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Silverstein, Michael (1976) Hierarchy of features and ergativity. In R. M. W. Dixon (ed.) *Grammatical categories in Australian languages*, 112–171. Camberra: Australian Institute of Aboriginal Studies.